
リトラ ～守りたいもの～

黄金 白銀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リトラ 〜守りたいもの〜

【Nコード】

N8959J

【作者名】

黄金 白銀

【あらすじ】

少年はある日、一つの卵を見つける。その卵から孵った一羽の鳥『リトラ』。少年はリトラと家族となる。その後、ある洞窟から巨大な怪獣が現れ、人々を、町を襲いかかる。このような災害が起きようとも、少年はリトラを、リトラは少年を守る。ウルトラQ第一話を原作にした物語です。

全研究員はあわてる。

「みんな、落ち着け！」

あわてているため、誰一人施設から出れていない。

ガガガガガガガガガガガガ！！

「今度は何の音だ？」

研究員は外を見る。

ドカアアアアアアアアアアン！！！！

火山が爆発した。

「うああああああああ！！！」

火山からドロドロとマグマが流れる。

「こ…これは…」

教授はふと思った。自然が苦しんでるんだと、何かが起ころうとしているんだと、そう思った。

「ん？」

教授の目に見えたのはマグマでも、岩石でもない、燃えさかる木々でもない。

薄く見える…大きな目玉だった…

「何だ？今のは…」

教授はその目玉に恐怖を感じた。

「火山弾が！！！」

教授は気づかなかった、火山弾に、大きな火山弾に…

「うわああああああああああ！！！！！」

火山弾が施設に当たり、生存者は一人もいなかった。

この世には…

多くの大自然がある…

大地や大空はもちろん…

動物…植物…人間も自然…

もし…

大自然のバランスが崩れ…

アンバランスとなり…

古代の自然がよみがえったら…

どうなるか…

その答えを…これからお話ししよう…

これから…この小説を読むあなたの心は…

あなたの体を離れ…

この不思議な世界へと入って行くのです…

第一話 見つけた卵

ここは日本、そして、おおぞらまち青空町と言つ名の町、そのまた町にある道場。
そこに一人の少年がいた。

名は『あいかわ愛川スザク』

愛川家の長男。十歳。空手、柔道、剣道と日本の武術をマスターしている。

「ハ！」

バキ！

「ハ！」

ボキ！

「ハ！」

ベキ！

今、彼は何をやっているのかと言つと…

「ハア…ハア…ハア…ハア…ハ！」

ベキベキ！！

空手のトレーニング中である。空手の道着を着て。

木の棒を折るというトレーニングだ。

「お、やってるな。」

声をかけたのは父『愛川ツバメ』。スザクの武術の師でもある。

「父さん！」

「お、十本も折るとはすごいな。」「でも、これだけでは強くなれない。もっと鍛えるんだ…自分を！」

スザクは汗をタオルでふき、そのままランニングに行く。

「はりきるなあ、スザク。すべては『新しい家族』のためなんだよね、モモ。」

ツバメは自分の妻であり、スザクの母『愛川モモ』の名をつぶやく。

ここは、トンネルの工事現場。

カン！…カン！…

ガガガガガガ！！

…コンコン…コンコン…

作業員達が一刻も早くトンネルを完成させようと景気良く、働く音が鳴り響く。

「おい、新入り！」

現場監督が新入りの若者を呼ぶ。

「何すか、大将？」

「ああ、トンネルの奥に行ったトロツコが土の重さか、何かで動か

なくなっただけだ。」

「何かして何するか、何かして。」

新入りは監督にツッコむ。

「だからすまねえが手伝いに行ってくれ。」

「はい。」

新入りはトンネルに入る。

「すいやせーん、手伝いに来やした。」

新入りはトロツコを頑張って押している作業員に声をかける。

「おう！すまねえ！押すの手伝ってくれ。」

新入りは言われた通りにトロツコの後ろから押す。

その時…

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

「な…何だ！？」

「じ…地震！？」

ゴゴゴゴ……………

しばらくすると地震は止んだ。

「お…納まった。」

作業員達はホッとした。

ガコン！

「ん？」

音はトロツコからだ。

まったく動かなかったトロツコが動きだしたのだ。

「あれ？まったく動かなかったのに？」

「お！」

作業員の一人が何かを見つける。

大きなネジだ。

「これが線路とトロツコの車輪の間に挟まってたんだな。」

「ああ、それじゃあ、動きやせんねえ。」

若者と作業員はトロツコと共に外へ出る。

監督は地震があつたため、しばらく作業は一時中止と全作業員に伝える。

「では…各自休憩！」

監督の声でみんな、バラバラに離れ、休憩に入る。

「ふあああああ…」

若者はあくびをしながら歩く。

コトン

「むにゃ？」

若者は音がした方を見る。さっき押していたトロツコから子供の手並に大きい卵状の石が落ちたのである。

「何だ、石か。」

若者は石を見る。

「そついやあ、こうやって遊んだっけ。」

若者は石をサッカーボールのように強く蹴り飛ばす。

コンッ！！

ピュウウウウウウ…

「ふー、飛ぶー！」

石はコンコンと跳ねて、道路の上に落ちる。

ブオオオオオオオオオオオオ！

車が走って来る。

ゴンッ！

石は弾かれる。

弾かれた石は木の上に落ちる。

ヒュオオオオオオオオ！

強い風が吹き、石は木から落ちる。

木の下は坂道で更に石は跳ねて、坂を瞬く間に降りて行く。

「行くぞー、シュート！」

コーンッ！

子供は間違えてボールではなく、石を蹴り飛ばしてしまう。

「うわーん！返してよー！」

一人の泣き虫な子供がガキ大将にゲーム機を盗られて泣いている。

取り返そうとするが、ガキ大将の方が背が高く、取り返すことができない。

「へっへっへっ！俺の物は俺の物、おまえの物は俺の物だ！」

「おい！」

ガキ大将に声をかけたのはランニング中だったスザクだ。

「あん、何だ、てめえ？」

「俺はスザク、弱いものいじめはやめろ！」

スザクは試合や喧嘩となると少し性格が変わる。例えば自分称の『僕』が『俺』に変わるのだ。

「何だと！」

スザクの態度にガキ大将がムカつく。よって…

喧嘩開始。

「でやー！！！」

ガキ大将のストレートパンチが飛んで来る。だが、スザクはスルツと軽々と避けて、

「ハー！！！」

ガキ大将の腕と服をつかみ、一気に背負い投げをする。

「ぐへえ！」

ガキ大将はおもいきり地面に叩きつけられる。スザクは腕を離す。ガキ大将は立ち上がり…

「うひゃああああん！」

ガキ大将は泣き出す。

「いじめたー!!」

ガキ大将は泣きながら逃げ出す。

「おまえがいじめだろ。」

スザクはガキ大将から取り返したゲーム機を、泣き虫少年に返す。

「ありがとう!」

少年は礼を言う。

「いいよ、次は自分で取り返せるように強くなっとくんだぞ。」

そう言いスザクは走り去って行く。

「うん!」

少年は元気に答える。

スザクはしばらく走る。

その時…

コン!

「ん?」

スザクの前に石が落ちてきた。さっきから跳ねて、飛んでいた石だ。

「何だ、石か。」

スザクは石を拾う。

ドクン…

「え?」

スザクは石に耳をつける。

……ドクン……ドクン……

「もしかして、これ…『卵』?…」

卵から聞こえる生命の音、スザクは石、いや、『卵』を家に持って帰った。

この石のような『卵』が…

スザクの運命を…

強く…動かしていくのです…

第二話 誕生

スザクは持ち帰った『卵』をタオルをクッション代わりに乗せて、スザクは動物図鑑を見る。

この『卵』が何の『卵』かを調べている。

「うーん…鳥の卵はゴルフボールくらいだから違うか、大トカゲの卵…にしてはでかい…ダチョウは日本にいないし、クジラの卵…あ、クジラはほ乳類か。」

スザクはしばらく考える。

次は、恐竜の図鑑を取り出す。

「もしかしたら恐竜の生き残りの卵かもしれない。」

だけど、恐竜の卵は大きすぎるということと、違つと判明。

「じゃあ、何だろう?」

スザクは更に考える。

「どうしたんだい?」

そう言いながら父・ツバメが部屋に入つて来た。

「父さん、拾ったんだ、『卵』を。」

「『卵』?」

スザクはツバメに『卵』を見せる。

「ふーん、帰つて来て、早々部屋に入り込んだのは、そのためか。」

「父さん、これ、何の『卵』かな?」

「え?…んー……………」

ツバメは『卵』を見て、考え始める。

「んー…孵化しなくちゃわからないなあ。」

ツバメは初めて見るらしくわからないようだ。

二人共、お手上げた。

と思いきや…

「そうか、孵せば良いのか！」

スザクは何か思いつき、部屋のおしいれから布団を取り出す。

「何をするんだい？」

スザクは『卵』を布団の中に入れる。

「こーやって、『卵』を孵すんだ。」

スザクは布団の暖かさ、ぬくもりで『卵』を孵すつもりだ。

「いつになるかわからないけど、孵るはずだ。」

スザクはさらにタオル何枚かを布団の中に入れる。

「ほう、孵ったらどうするんだい？」

ツバメの質問にスザクは止まる。

スザクの頭から冷や汗が滴れる。

「……………飼っちゃダメ？」

返事はこの一言。この一言に対し、ツバメは…

「危険じゃなかったら飼って良いよ。家族が増えて良いしね。」

ツバメの言葉にスザクは明るい笑顔となる。

「ありがとう！父さん！」

ツバメはにこやかに部屋を出る。

「…『新しい家族』ができるんだ、ペットぐらい良いよね。モモ…」
ツバメはそう言いながら道場へと入る。

道場には多くの生徒が自らを強くするため、特訓にはげんでいる。

「もっと気合い入れる！」

ツバメが叫ぶ。

「ハッ！」

生徒が力強く答える。

スザクはジッと孵化を待ち続けている。

「……………」

無言で待っている。

「…………熱が足りないのかも……」

スザクはそう思い、柵をあさり、ある物を取り出す。

カイロだ。

スザクはカイロをクシャクシャッとこねり、熱を上げる。

「あ！熱くなった。」

どんどんこねて熱くする。

ジユウ！

「熱い！！！」

こねすぎて熱くなりすぎた。スザクは両手に息を吹きかける。

ちよつと熱いが、スザクはカイロを布団の中に入れこむ。

「これでちよつとはマシになるかな？」

スザクはふたたび孵化を待つ。

すっかり夜となった。

晩ご飯を食べている途中でも『卵』が気になって仕方がない。

「気になるかい？」

そんな息子に声をかける父・ツバメ。

「父さん……うん…もしかしたら今孵化してるかもしれないし…もしくは……」

「ゆで玉子になってる？」

ウッ！

図星だ。

「じゃあ心配だね。」

「うん……」

スザクはちよつと不安だ。

スザクはカイロはちよつとやりすぎかと思っている。

「やっぱ……カイロ…やめよう。」

スザクは布団の中からカイロを取る。

「…今日は寝よ。」

そう言い、スザクは掛け布団に潜る。

『卵』を抱いて……

スザクは学校にいても『卵』が気になる。窓の外を見てはため息をつく。

「ハア……」

「どうしたの!？」

「わぁ!」

ドテッ!!

スザクは椅子ごと倒れる。

「いててて…」

スザクは後頭部を打ったらしく、後頭部を抑える。

「大丈夫!？」

声をかけた者はスザクにかけより、スザクの腕を掴み、優しく立ち上がらせる。

「ありがとう、じゃなくて…びっくりするじゃないか、リカ!いきなり顔面近づけて!」

「はは!ゴメンね!」

声をかけた者、少女の名は『ひがしやま東山リカ』。

明るく、男勝りなところがあり、ショートの髪型が似合う元気な少女。スザクとは幼稚園の頃から友達で、幼なじみなのである。

「で、何考えてたの?」

リカはスザクに問い掛ける。

「え? いや…何でもないよ、ただ考え事を…」

「何を考えてたの?」

興味津々でスザクから離れようとしなない。

「いや…それは…」

「わかった! 私のことでしょ!」

コケッ!

スザクはコケる。

「当たった!？」

「あのね」

スザクはあきれたのか、ため息をつく。

その頃、スザクの部屋では…

パキッ…

何かが碎かれる、弱い力だが、何かが碎かれる音がする。

パキ…パキパキ…

「わあ！私にだけ教えてくれるんだ、スザクの秘密！」

「内緒にしてよ。」

スザクはしつこいため、仕方なくリカに自分の『考えていること』を教える。

スザクとリカはスザクの家に入る。

「父さん、ただいま！」

「おじさん、おじゃまします!!」

………

「あれ？」

二人そろって言う。

静かだ。いつもなら父・ツバメが明るく「おかえり。リカちゃん、いらっしやい。」とお出迎えをするはずなのに。

「おかしいなあ、父さん！」

「きつとお買い物に行ってるのよ。」

「んゝ…それにしても、ドアに鍵がかかってなかったし…」

「それよりさあ、スザクの秘密、早く教えてよ。」

リカはスザクの父よりも、スザクの秘密の方がよっぽど気になるようだ。

「あのねえ。」

「何かな、何かな？」

リカはルンルン気分だ。

スザクとリカはスザクの部屋に入る。

「で、『秘密』は!？」

「ちよつと待ってて。」

スザクはおいしいを開けて、その『秘密』を取り出そうとする。

「え……………」

スザクは眼を見開いてかなり驚く。

なんと…『卵』がわれてこなごなに砕けていたからだ…

「どうしたの、スザク?…ん?…何、これ？」

スザクの後ろからヒョコツと顔を出し、問い掛けた後、われた『卵』のカケラを見る。

「あゝ…………これが『秘密』なんだけど…見ての通り、われてます。」

「元々何だったの？」

「さあ、何かの『卵』だったんだけど、生まれたみたい……」
「へえ、そうなんだ。」

.....

「じゃあ、中身は？」

「さあ……」

.....

「どこ行つたあああああああー!!」

スザクは大慌てで部屋を飛び出す。

「ちよつと待って！」

リカもスザクに続いて飛び出す。

「大丈夫だよ。」

二人に声をかけたのはスザクの父・ツバメである。

「父さん！」

「大丈夫って!?!」

二人はツバサに近くに行き、今の言葉の意味を聞く。
「ここにいるからだ。」

パイパイ……

ツバメが見せたのは、ツバメの手に乗る小さな『鳥』だ。

パイパイ……

赤ん坊のようで、大きさはスズメ並だ。

「かわいい！」

リカは『鳥』の可愛らしさに見惚れたようだ。

「父さん……この『鳥』が……」

「ああ、あの『卵』が孵ったんだ。」

ツバメがスザクに説明をする。

「『鳥』……だったんだ……」

ピーピー……

『鳥』はツバメからスザクの方へと移る。

「へ？何で、僕に？」

「懐いているようだね。」

「そうか……へへ。」

スザクは『鳥』の頭をなでてあげる、『鳥』はうれしそうだ。この時、スザクは「これが命なんだ」と感じた。小さくかわいい命だと思った。

「ねえ、名前は？」

リカが問い掛ける。

『鳥』は首をふる。

「無いのか……じゃあ付けてあげよう。」

スザクは何て名前にしようか考える。

「ん……小さいし……そうだ、『小さい』は英語で『リトルlittle』

だから、君の名前は『リトラ』だ！君は今日から僕達の家族だ！」

ピー……！！

リトラはとてもうれしそうだ。

これが……

スザクと……

リトラの……

出会いである……

これから……スザクの運命が……

動き始めるのです……

第三話 洞窟発見

リトラを新しい家族として迎えた愛川家は今、リトラの部屋という
か鳥小屋を作っている。

トントントン…

「父さん、どう？」

スザクは父・ツバメに鳥小屋がどこまでできているかを問いかける。
「ん？もうすぐだよ。」

鳥小屋は大体はできている。

「あ！リトラの事、母さんには…」

「大丈夫、もう言ってるよ。」

「それで……」

「飼っちゃダメとは言っていないよ、むしろ大歓迎だそうだ。でなき
や鳥小屋なんて作らないよ。」

「…よかった。」

スザクがホツとすると近くにいたリトラもホツとしたようなフリを
する。どうやらスザクのマネをしているようだ。

「できたぞ！」

完成したリトラの鳥小屋は小さいがとてもかわいらしい鳥小屋だ。
まだ小さいがだんだんと大きくなると思うので普通の鳥小屋よりち
よつと大きめの鳥小屋だ。

「リトラ、君の家だよ。」

スザクはリトラを鳥小屋に近付けるとリトラは自分から鳥小屋に入
って行った。

ピイピイ♪

リトラはうれしそうに鳴く。

リトラが愛川家のペット、というか一員になって、10日。

リトラは成長し、羽が生えてきたが、まだ飛べるほどではなかった。リトラは鳥小屋の前で飛ぶ練習をしている、翼をパタパタと羽ばたかせている。が、なかなか飛ばない。

「リトラ、がんばれ!!」

スザクは横で応援している。

ピイイイイ!

もっと強く羽ばたくとリトラがちょっと浮いた。疲れたのかリトラは翼を羽ばたかすのをやめた。

「ちょっと浮いた、やったね、リトラ!」

ピイイ…

リトラはかなり疲れている。

同時刻、トンネルの工事現場では…

ガガガガガガガガガガガガガガガガガガ！！！

シヨベルカーが重い土や岩を持ち上げて、トロツコに乗せて行く。

「さあ、どんどん行くぞー！」

シヨベルカーの運転士はシヨベルカーを操縦し、どんどん掘って行く。張り切りすぎるのも問題だが。

ガコン！…ガコン！…

「おらあー！！」

ガコン！…

ガガ…ガ…ガ…

「あん！？」

どうやら硬い土にぶつかったようだ。

「こんなもん、なめんなよー！！」

運転士はエンジンをフルパワーにして土を掘る。

「おらおらおらおらー！！」

ガコン！…ガコン！…ガコン！…ガコン！…ガコン！…ガコン！…

バコン！…！！…

「へ？」

運転士はびっくりする。なんと掘り続けたら、もう一つのトンネル、すなわち洞窟に入ってしまったのだ。

「何だ、ここは…」

運転士はシヨベルカーから降り、洞窟を見渡す。だが、洞窟は暗くて見えなかった。シヨベルカーに装置していた懐中電灯の明かりをつけ、改めて洞窟の辺りを見渡す。明かりをつけて運転士はとも驚いた。

洞窟の高さは10メートルぐらいはあった。

この洞窟はまるで…

「…まるで…でさえモグラが掘った後じゃねえか……それよりもこの事を知らせんとな。」

運転士はシヨベルカーに乗りこみ、ひとまず報告のため外に出る。

「リトラ！」

リトラが愛川家の一員になって14日の昼のこと…

スザクは見た、リトラが自力で空を飛ぶのを。

「リトラが飛んだー！」

スザクはともうれしそうに笑う。

ピーー！！

スザクはまだ知らなかった…

リトラもまだ知らなかった…

工事現場に現れた…

あの…洞窟の中に…

人類史上最悪の…

『敵』がいると言った事を…

第四話 リトラと友達

リトラが愛川家の一員になってから20日、短期間だが、リトラはとても大きくなった。大きさはハヤブサと同じぐらいの大きさだ。すっかり変わってしまった、尾の羽も生えて、しっぽのようになっていた、姿はきれいなクジャクのようなようだ。

リトラは今スザクの腕に乗っている。

「大きくなったな、リトラ。」

スザクもリトラの成長に喜んでいる。

ピイイ！

リトラは元気良く答える。「うん！」と答えたのだろう。

「スザクー！友達が来たよー！」

父・ツバメの声だ。

「うん、今行くー！」

スザクはリトラに「ちょっと待ってて」と言い、リトラを鳥小屋で待たせて、家の玄関まで行く。

「いらつしやいー！」

スザクは遊びに来た友達を迎える。

「おっじゃましーす！」

やってきた友達は全員スザクが通っている小学校のクラスの子。

東山リカがいるのはもちろん、メガネの少年『真崎ケンタ』まこきに太った男の子『丸田ヨシキ』まるた、長髪でおとなしい少女『緑山ユキエ』みどりやまである。

「ねえ、スザクーリトちゃん、どうしてる？」

リカがスザクに聞く。

「リトラなら小屋にいるよ…ってリトちゃんって!？」

「ああ、私はリトちゃんって呼んでるの。」

スザクはハアツとため息をつく。

ちなみに、リカ以外の友達は学校で聞いており、今回はリトラのお披露目である。

「リトラ！みんなが来たよ！」

ピィィィ！

リトラはスザクの友達が来てくれて喜んでいるようだ。

「やつほーリトちゃん！こんにちは！」

リカがあいさつする。

ピィ！

リトラもあいさつする。「こんにちは」と。

「かわいい！」

「すげえなあ！」

ケンタ、ヨシキ、ユキエが順番にリトラの頭をなでる。

ピィ！

リトラは気持ちよさそうだ。

「リトラ、行くぞ。」

スザクはリトラの大好きな赤いボールを投げる。

すると、リトラはそれを飛んで追いかけて、口でキャッチする。

「すごい！」

みんなは拍手をする。

リトラはスザクの腕に乗り、ボールを渡す。

「じゃあ、次はケンタ、やってみなよ。」

「ええ！！？」

ケンタは呼ばれて驚く。

「ケンタ、ファイト！」

ヨシキが背中を押す。

「う…うん…」

ケンタはスザクからボールを渡され、

「えい！」

一気に投げる、が…

ピューン…

遠くにボールは行ってしまった。

「あゝあ…」

リトラはそれを追って飛んで行く。どの家の窓にも当たらず、とい
うか当たる前にリトラはボールをキャッチし、戻ってきた。

「よくやった、リトラ。」

リトラはスザクではなくケンタの腕に乗る。

「え？僕に？」

「投げた人の腕に乗るようにするんだ、と思ってるんだよ。」

スザクが説明する。

リトラからボールを受け取り、ケンタは笑う。

「ねえ、次はオイラに！」

ヨシキが手を上げる。

「いいよ、はい。」

スザクはボールをヨシキに渡す。

「んゝ…それゝ…!!」

ヨシキは思いっきり投げる、だが…

ポーン ポーン ポーン ポーン…

ボールは全然飛んでない。よってリトラも飛んで行かない。

「あれ？」

「そゝれ。」

次はユキエの番でユキエはボールを上高く投げる。

ピー!

リトラはボールを追い、空高く舞い上がる。

ビュン!!

リトラはかつこよく決めるためか、一回転してキャッチする。

「まあ、すごい。」

「いつ覚えたんだろ、あんな技…」

次はリカの番…

「んゝ…おりゃあ…!!」

リカは力強く投げる、けど、それは声だけ。実際は軽く投げている。

バビュン!!

なぜかリトラはすごい速さでボールをキャッチする。

「リトラゝ、しなくていいから…ハア…リカにはついていけない…」

スザクはリカに関しては落ち込むばかり。

「ねえ、リトラちゃんは何て鳥さん？」

ユキエが質問する。

「え？」

「だから、カラスとかハトとか…種類、わかりませんか？」
「どうやら鳥の種類についての質問のようだ。」

「え……え」と……

スザクはすぐ考える。リカに目線を向けるが、リカは目を背ける。

「わからないのですか？」

「…実は…リトラが入ってた卵をたまたま拾って、それが孵って、それを育てて…」

スザクは少しパニックになっている。

「要するに。」

ケンタ、

「わからないんだね。」

ヨシキが言う。

「わからないのですか？例えば、『ミドリコンゴウインコ』とか、『キンバト』とか、『シチメンチヨウ』とか、『チヨウゲンボウ』とか…」

「全然わかんないよ！」

「では、写真一枚いい？」

「え？何で？」

「家で調べてみます、私の父は鳥の専門家だから。」

「あ、それ、いいね。」

「スザクはどうする？」

リカはスザクに聞く。

「うん、僕も気になっているから、お願い。」

「では、失礼します。」

ユキエは携帯電話を取り出し、カメラ機能でリトラを撮影する。

ピー！

なぜかポーズをとるリトラであつた。

時は過ぎ、ユキエは自宅に戻り、リトラが何の種類なのかを調べ、
けど、図鑑を眺める内に眠ってしまった。

「ユキエ、お父さんが帰ってきたわよ。」

ユキエの母の声、その後にユキエの父がやってきた。

「おやおや、鳥の図鑑を見て眠ってしまったのか。」

ユキエの父・ワシオは毛布をかける。

「ん？」

ワシオがユキエに毛布をかけた後、目にした物は、ユキエの携帯の
画面に写っていたリトラの画像である。

バツと携帯を取り、リトラの画像を真剣に見る。

「こ…これは……」

ワシオの額から汗が一粒一粒とたれている。

感動…

心から感動する…

それは…自然を見てでしょうか…

はたまた…珍しいものを見た時でしょうか…

答えは…

あなたの心の中にあります…

第五話 洞窟調査

ここはトンネル工事現場。

今ここではトンネル工事中に発見した洞窟について、学者や自衛隊が調査をしているところだ。

謎の洞窟が見つかった事により、多くのマスコミが現場に集まって来ている。

「発見したのはあなたですか!？」

「状況はどうなっているのですか!？」

「あの洞窟には何があるのですか!？」

このようにマスコミはいち早く情報が欲しく、工事の現場監督や自衛隊の隊長、学者に質問攻めばかりしている。

「今のところ、あの洞窟は何のために掘られたのか、自然現象の一種なのか、現在調査中です。」

自衛隊の隊長、

「私個人の考えでは、自然現象ではなく、何かが掘った後だと思っています。」

学者、

「私が発見者ではなく、シヨベルカーの運転士である彼が発見者です。ですが今は自衛隊に事情聴取をしている最中ですので、インタビューはできませんので。」

工事現場の監督、

「では、洞窟の事はまだわからないのですね?」

マスコミの人々が言う。

「ええ、今のところは…」

学者が答える。

外でマスコミがインタビューしている中、洞窟の調査隊が洞窟に入
って行く。洞窟は二つの通路になっているので調査隊も二手に別れ
る。洞窟を調査するのは一つの通路に自衛隊員三名と工事の作業員
二名、学者が四名。よって合計十八名である。
「気をつけてくださいね、足場が悪いんで。」
工事の作業員が言う。

「あいてっ!!」

言ってるのに学者の一人がコケる。

「大丈夫か？」

自衛隊員の一人が、学者の一人を助ける。

「ありがとうございます。以後気をつけます。」

学者は礼を言う。

だんだん奥を調査する調査隊。

「何も無いですね…」

「何か…珍しい物でもないかなあ、とは思ってたんですけど…」

調査隊はかなり長い道を進んで来た、だが洞窟はただの洞窟で何も
見つからなかった。

「何も見つからないとは…では何のために掘られた後なのだ。」

「これが人為的に掘られた以外考えられない。」

これだけ大きい洞窟をモグラなどの穴を掘る動物が掘れるわけがな
い。

これは人工の物だ…と学者達は考えている。

そして、不思議なことに洞窟の天井はだんだんと高くなってきてい
る。

そして洞窟の外では自衛隊や学者達が洞窟をどうするか、会議をしている。

「失礼します。」

その会議場に一人の女性が入って来た。

「おお、『ナオコ』君。待ってたよ。」

入って来たのは生物学者の『赤木^{あかぎ}ナオコ』である。

「お待たせしました、皆様。紹介しましょう、物理学者の赤木ナオコ君です。」

「初めまして、皆様！」

ナオコは頭をペコツと下げてあいさつをする。

「よろしく、私は自衛隊の隊長である『山内^{やまうち}カズマサ』一佐だ。」

先ほどマスコミに質問攻めされていた自衛隊の隊長はたくましい顔立ちをしている立派な男性だ。

「現在、どういう状況ですか？」

ナオコが自衛隊隊長カズマサに質問する。

「ああ、今調査隊が洞窟に入り、調査中だ。」

「そうですか、で皆様はどうしてあんな洞窟ができたと思いますか？」

ナオコは学者達に質問をする。

「私は誰かが人工的に創り出したものだと考えています。」

「私は地盤変化により、できたのだと考えております。」

学者達、一人一人が考えを述べた。

「そう言う君は何だと思うのかね？」

学者達の中で一番年上の男性が質問を返す。質問されたナオコは持ってきたカバンからある一冊の大きな本を取り出す。

「何だね、それは？」

「『古代生物図鑑』。」

『古代生物図鑑』とは…

人類が誕生する前…古代の地球に生息していた生物…動物だけでない。

く、植物、魚類、恐竜、すべての生物がこの図鑑には記録されている。

「その『古代生物図鑑』がどうかしたのかね？」

「え」と」

ナオコは図鑑をパラパラとめくる。

「……あ、これです！これ、見てください。」

言われて学者達は、ナオコが開いた図鑑のページを見る。

「『ゴメテウス』？」

ページに記されていたのは、四本足で頭に角があり、二本の牙を持つ動物だ。

「はい、この『ゴメテウス』は新世紀大三記頃に生息していた身長10メートルもある原始ほ乳類で、いつも土の中で生活をしていたのです。」「あゝ君が言いたい事がなんとなくわかった……君はあの洞窟は、その『ゴメテウス』が掘ったんじゃないかと思ってるんだな？」

一人の学者がナオコの説明に口をはさむ。

「はい、その通り！」

「だとしたら、おかしいじゃないかな？その『ゴメテウス』は古代生物でもう絶滅してるんじゃないか？」

「ですが、『ゴメテウス』は変温動物なので土の中で生き残ってたのかもしれないよ。」

ナオコは力説する。

「『ゴメテウス』は10メートルはあります、洞窟の大きさからして、まずあり得るでしょう。」

「ハア、ばかばかしい、そんな空想があつてたまるか！」

科学者の一人が怒鳴る。

「おい、君。」

「私はあくまで意見を言っただけです、決定的な証拠はありません。」

「ナオコは堂々と反論する。」

「キサマ〜!」

「ん?……ちよつと待ってください。」

ナオコはポケットから携帯電話を取り出す。

「はい、もしもし……ああ、先生!……はい……はい……ええ、それ本当ですか?……はい……わかりました、そちらに行きます。」

ナオコは携帯電話を切り、ポケットにしまう。

「すみません、ちよつと急用ができたので、失礼します。」

「そうか、わざわざ来てくれてありがとう。こちらは我々で解決するよ。」

「それでは!」

ナオコは会議場を去る。

想像……空想……架空の産物……

それこそが……

アンバランスの原点なのかもしれません……

第六話 母さん

リトラが愛川家の一員になって21日。

スザクの友達はまたスザクの家に遊びに来て、リトラと遊んでいる。

「リトラー！」

「こっちこっちー！」

庭でリカ、ヨシキ、ケンタ、リトラが、鬼ごっこしている。

スザクとユキエは座ってみんなの楽しんでいる風景を眺めている。

「ハア、リトラはすっかりみんなの友達だよ。」

「そうですね。」

「あ、そうだ、ユキエ、リトラについて何かわかった？」

スザクはユキエに問い掛ける。

「すみません、鳥の図鑑を調べてもリトちゃんについては何もわからなかったのです…」

ユキエは申し訳ないような顔をする。

「そうか…」

スザクも残念に思う。

「そういえば気になってたんだけど…」

声をかけたのはリカ。

「スザク、おばさんは？」

おばさんとはスザクの母のことだ。

「ああ、母さん、母さんは…いないよ。」

「え？」

みんなは驚き、口が閉じる。

「いないって…」

「うん…ちょっと…」

「スザクー！」

声はスザクの父・ツバメだ。

「父さんが呼んでる。みんな、ちょっと待ってて。」

スザクはツバメの元へ行く。

スザクが行ったその後、リ力達は集まる。

「みんな聞いた！？スザクのお母さん、いないって！？」

「聞いた！」

「まさか、スザクのお母さんは…」

「お亡くなり…」

またもやみんな黙り込む。

「みんなー！」

スザクはリ力達に声をかける。

「な…何、スザク？」

「今から父さんと出かけなきゃいけないから、悪いけど、みんな帰ってくれる。」

スザクは申し訳ないと顔の表情で表している。

「うん、わかった。」

リ力達は帰ることにする。

「リトラ、悪いけど僕と父さん、出かけなくちゃいけないから、勝手に飛んで外に出ちゃダメだよ。」

スザクはリトラに言い聞かせる。

ピー！

リトラは「了解」と答えたのだろつ。

「けどとおじさんと一緒に出かける急用って？」

ケンタが質問する。

「ああ、母さんの所に行くんだ。」

「ええ!？」

一同びつくりする。

「何でびつくりするの?」

スザクは引く。

「え…だって、スザク、お母さん、いないって…」

「え?…」

………

「ああ、母さんは家にいないって事、今母さんは病院で入院してる。

」

みんな、ポカーンとしている。

「そうならそうと言ってよ、変な想像しちゃったじゃない。」

「はははは、また説明不足になっちゃった。」

スザクは苦笑いする。

「でも病院で入院中だなんて、お母さん、どこか悪いのですか?」

ユキエは心配そうに答える。

「お母さん、入院と言っても大したことじゃないよ、むしろ『うれしい入院』。」

「うれしい入院?」

みんなの頭に?マークが表示される。

「なんなら、みんなもついて来るかい?」

ツバメがリカ達を誘う。

「どうしようか?」

リカ達は相談をする。

………

「決定ー！」

リ力達の答えは…

「行きまーす！」

ここは病院…

スザクの母が入院している病院だ。

スザクは病院に到着し、スザクの母がいる病室へ向かう。

「ここだよ。」

ツバメが指差す部屋の前の名前に『愛川モモ』と書かれている。

「へえ、スザクのお母さん、モモっていうんだ。」

「そうだよ。」

スザク達は病室に入る。

「母さん、来たよ。」

スザクはベッドに座る女性にあいさつをする。

「あら、スザク、友達もいっしょなの？」

その女性こそスザクの母・モモである。

「こんにちはー！」

リ力達はモモにあいさつをする。

「こんにちは。」

モモもあいさつをする。

「モモ、身体の具合はどうだい？」

ツバメがモモに問い掛ける。

「ええ、元気ですよ。」

モモは優しい笑顔で答える。

「それはよかった。」

ツバメも優しい笑顔だ。

「あの…母さん、これ…」

スザクはモモに携帯電話を渡す。携帯の画面にはリトラが表示されている。

「あら、かわいい。この子がスザクが拾った卵から生まれてきた子ね。」

「そうだよ、さすがに病院には連れて来れないけど…」

「ふふ。」

モモは優しく笑う。

「あの…おばさんは何の病気で入院しているのですか？」

「あれ？言ってなかったの？」

「うん、ちょっとびっくりさせようと思って。」

「『うれしい入院』と言ってね。」

「ああ、確かに『うれしい入院』ね。」

モモはおなかをなでる。モモのおなかはポツコリと出ている。

「おなかが出てる…もしかして…」

リカは目をきらきらさせる。

「太って入院!？」

ドカ!!

一瞬の内にスザクがヨシキにかかと落としという名のツッコミをくらわせる。

「ちがう…」

スザクは今黒い。

「もしかして…『赤ちゃん』ですか!？」

リカが言うと、モモはコクツとうなずく。

「わぁ!スザク、『お兄ちゃん』になるんだ!」

この中で一番にはしゃぐリカ。

「そうだよ、だから楽しみで…」

スザクはほほ笑んでいる。

「じゃあ、リトラちゃんもこの子の『お兄ちゃん』になるわね。」

モモもほほ笑んでいる。

「そうだね!」

「わぁ、リトちゃんも『お兄ちゃん』だ!」

病室が明るくなるほど、スザク達はほほ笑んでいる。

「母さん…おなか…触って良い?」

スザクはモモに聞く。

「いいわよ。」

そう言われ、スザクはそつとモモのおなかを触る。

「わぁ、生きてるみたい!」

スザクは感激する。

「って生きてるみたいじゃなくてちゃんと生きてるんですけど。」

そこへリカがツツコミを入れる。

その光景にみんなは笑う。

命…

生まれてくる命…

死にゆく命…

これは…自然界において…

決して破ることのできない…

『ルール』なのです…

第七話 トシユキ

リトラが愛川家の一員となつて23日。リトラはまたもや大きくなり、スザクと同じくらいとなつた。

「リトラ、また大きくなつたな。」

ピー！…

リトラは今日も元気。

スザクそんなリトラを見るのがうれしく思っている。

「…リトラ、何て言う鳥なんだろう…」

ツバメはスザクとリトラを見て、ボソツとつぶやく。短期間で人間の子供並の大きさになるのだから、そう思ってもおかしくはないだろう。

「あそこまで大きくなるとはなあ、食べるのは葉っぱとかパンとかお肉だし…」

ツバメは不思議に思う。短期間でここまで大きくなるとは普通の動物では考えられない。

「……まあ、いいか、スザクも楽しんでるし、リトラはああいう体格なんだろう。」

と言い、ツバメは家の中へと入って行く。

そしてこちら、トンネル工事現場、こと謎の洞窟調査現場。

ふあああああああ…

一人あくびする自衛隊員『羽根村トシユキ』

この間、自衛隊に入隊したまだまだの新入り。

「こおおおらあああー！」

ビクッ！

いきなりの怒鳴り声にトシユキはびっくりする。

「ははははは…はい！…私は…ただ眠たくて、あくびをしたのではなくて…ちよつと暇だな…っと思っただけで…けっして！だらしない！ということはないのでございます！…！」

トシユキはものすごくあわてて言い訳を答える。

「アハハ、ストップストップ！」

誰かの笑う声、その声にトシユキは止まる。

「か…上川！」

声の主は『上川アヤコ』。

トシユキの同期に入隊した女性自衛隊員。

この二人は何かと仲が良くて、よくコンビを組んでいる。

「まったく…何勘違いしてるのよ。」

「びっくりするし、勘違いもするよ！いきなり怒鳴るから！」

トシユキはびっくりしてなのか、左胸を抑えている。心臓がバクバ

クと鳴っているのだろう。

「…で、何であくびしたのかな？」アヤコはいじわるそうな眼でトシユキを見る。

「あくびの理由？…暇だもん、こんな所で見張りだなんて。」

トシユキとアヤコがいる場所はトンネル工事現場から離れた場所で、岩と草原しかない。

「ここには誰も来ないし、何もこない。だから見張りなんて置く必要があるのかな？」

トシユキは疑問に思う。

「見張りとは自衛隊としての訓練だと思えばちよつとは楽じゃないかな？」

アヤコの言葉にトシユキは考える。

「……うん、そうだね。」

トシユキは納得する。

「じゃ、見張り、続けますか。」

………

二人はジツとする。

「やっぱり暇だ…」

ピンポン

愛川家の家の呼び鈴が鳴る。

「はい。」

ツバメは家の玄関の扉を開ける。

「どなたですか？」

ツバメの問いかけに答える訪問者。
訪問者はタキシードを着て、胸ポケットに赤いバラ、シルクハットをかぶっている。

「初めまして、私『モリオカサーカス』の団長『森岡ヨウヘイ』と申します。」

「そんな方が我が家に何かご用ですか？」

ツバメは質問する。

「そちらで飼われていらっしゃる『鳥』に用があるんです。」

「『鳥』？…ああ、リトラのことですか、リトラに何か？」

「お宅で飼われている鳥は非常に珍しい、ぜひ私に譲っていただきたい。」

「残念ですが、リトラは我が家の一員ですので、譲るわけにはまいりません。」

「そこをなんとか…」

「ダメです。」

ツバメは固く何度も断る。

「……ではあがらせていただきます！」

ヨウヘイは無断で家に入る。

「あ！ちよつと！」

ツバメはヨウヘイを追いかける。ワシオは庭に出て、リトラを見つめる。

「おお、発見！」

ヨウヘイは不吉な笑みを浮かべる。

「……？…おじさん、誰？」

スザクはのんきに聞く。

「坊や、その鳥をおじさんに譲ってくれるかな？」

ヨウヘイはスザクを子供扱いし、今のような口調で言った。

「やだ。」

スザクはヨウヘイをにらみつける。

「……チツ…ムカつくガキだ……この鳥はもらって行く!」

ヨウヘイは無理やりリトラを連れて行こうと、リトラの首をつかむ。

ピイイイ!!

リトラは嫌がる。

「何するんだ!」

スザクは止めようと、ヨウヘイの腕をつかむ。

「うるさい!」

ワシオは、スザクを振り払う。

「うわあ!!」

スザクは突き飛ばされ、家の庭にある壁に叩きつけられる。

クワア!

その光景を見て、リトラは怒る。

クワアアア!

リトラはヨウヘイに襲いかかる。

「うわ!うるせえ!!」

ヨウヘイはリトラの両足をつかむ。

「リトラ!!」

リトラは身動きがまったく取れない。

「さあ、連れて行くぞ!」

ヨウヘイはリトラを連れて帰ろうとする。

その時……

ボカツ!

ツバメがヨウヘイの頭にチョップする。

「ガ！」

ワシオは頭を抑える。

「父さん！」

「あ…あんだ…痛いじゃないか…！」

「無理やり我が家の一員を連れて行こうとする『誘拐犯』をこらしめただけですよ。」

「こんにやろお…！」

ヨウヘイはツバメに仕返しに殴ろうとするが、ツバメはスルツとかわし、ヨウヘイの足を足ではらい、倒す。

「これを『足払い』と言います。」

ツバメはにこやかだ。

「…いてて…今日はもう帰ります。ですが、あきらめませんよ！」
そう言い残し、ヨウヘイは去って行く。

『欲』…

人の心からは『欲』が生まれる…

食欲…利欲…物欲…

その『欲』が大きくなると…

人は恐ろしい獣となるのです…

第八話 訪問者

リトラが愛川家の一員になって24日。

「昨日そんなことがあったんだ。」

スザクはリカ達に昨日の出来事を話していた。

「うん、おかげで痛かったよ。」

スザクは昨日リトラをさらおうとした森岡ヨウヘイを止める時、腕につかみかかったところで投げられ、壁にぶつけてしまった背中を抑える。

「大変だったね。」

「うん、でも愛すべき家族を守ったんだ！これぐらい平気だよ！」
スザクは元気だ。

「ねえ、ユキエ。リトラの事は…」

スザクはユキエにリトラについて問いかける。

「ごめんなさい、まだわかんないんです。」

「そっか…」

スザク、またもやがっかり。

「落ち込まないで、スザク、それでリトちゃんは？」

「外だよ、飛んでは。」

窓の外を見ると、リトラが楽しく飛んでいる。

「楽しそうだね。」

ケンタ、

「昨日連れ去られそうだったのに…」

リカ、

「いやな事はすぐ忘れるタイプじゃないかな？」

ヨシキ、

「かもしれせんね。」

ユキエが言う。

そしてスザクは、何も言わず、リトラの飛ぶ姿を見ている。

ピンポン！…

家の呼び鈴が鳴る。

「まさか！…」

スザクは昨日やって来たヨウヘイが再び来たのかと思った。スザクは急ぎ家の玄関へと走る。

「しょうこりもなく！」

スザクは玄関に到着する。

そこには訪問者の相手をしている父・ツバメとその訪問者であった。訪問者はツバメと同じ年くらいの男性と若い女性であった。

「あれ？…あいつじゃない…」

「あの森岡という男だと思ったのかい。」

「……うん……」

スザクは勘違いして、恥ずかしく思っている。

「ははははは！」

「初めまして、私は鳥の研究をしています、生物学者の『緑山ワシオ』と申します。」

男は『緑山ワシオ』。

「私は物理学者の『赤木ナオコ』です。」

女性は『赤木ナオコ』と、それぞれ自己紹介をした。

「初めまして、愛川スザクです。」

スザクは丁寧にあいさつする。

「初めまして。」

二人もあいさつする。

「で、今日はどういったご用件で来られたのでしょうか？」ツバメが二人の訪問者に問いかける。

「お宅で飼われている……」

「お父さん！」

いきなりの声に話がとぎれる。声の主はユキエだ。

「ユキエ。そうか、君は娘の友達だったのか。」

ワシオはスザクに向かって言う。

「ユキエの父さんだったんだ。」

「なら頼みがあります。スザク君、君が飼っている鳥を見せてほしいんだ。」

ワシオはスザクに頼む。

「リトラを……」

スザクは考え出す。

「すみません、昨日無理やりリトラを連れ去ろうとする人がやって来ましたので、少し不信感を抱いてまして。」

ツバメが説明する。

「そうですね、でも私達はその鳥、リトラを連れ去らおうなど、まったく考えておりません。」

ワシオはスザク達に信じてほしいと強くうったえる。

「一目でもいい、見させてくれませんか？」

「それはスザクの決めることです。」

ツバメが答える。

……… スザクの答えは………

「わかりました。」

スザクの答えは『見せる』に。

「ありがとう！」

ワシオは礼を言う。

「リトラー、お客さんだよー！」

スザクは飛んでいるリトラを呼ぶ。

リトラはスザクの腕に降りる。

「わぁ、珍しい！」

ワシオは感動する。

「この鳥は初めて見る。どの図鑑にもものっていないぞ！わは！」

ワシオ、浮かれすぎ。

「先生、私が持っている『古代生物図鑑』にもものっていません。まさに新種ですよ！」

ナオコは図鑑の全ページに眼を通したが、リトラと思われる生物は記されていないかった。

「この子はどこで手に入れたのだい？」

ワシオはスザクに質問をする。

「ランニングの途中で石のような卵が落ちてて、それを持ち帰って、孵化させたんだ。」

スザクはワシオの質問に答える。

「それってどこ？」

次にナオコが質問する。

「えーと、あっちの道路上だけど……」

スザクが指差した方向はあの例のトンネル工事現場がある方向だ。

「では、あの辺りにリトラの同族がいるのでは！？」

ワシオはそう考え、すぐさまトンネル工事現場に向かう。

「ああ！先生！」

ナオコはワシオの後に続き、外に出る。

「……行っちゃった。」

スザク達は置いてけぼり。

その頃、ここはトンネル工事現場、もとい謎の洞窟調査現場。

ここでは、どうしてあんな洞窟ができたのか。まだ調査をしていた。

「ふああああ…やっぱ眠い…」

あくびをしたのはトシユキだ。

「ずっと立ちっぱなしだもんなあ…ん…ん…」

トシユキは腕を上大きく伸ばす。

「確かに暇よね。」

声はアヤコ。

………

沈黙する。

「ん？誰か来る。」

トシユキが目撃した人は、ワシオとナオコだ。

「あ…あの人、この前来てた人。」

「また来たんだ。」

二人が言っているのはナオコのことである。

「すみません、どうしたのでしょうか？」

アヤコがワシオとナオコを止める。

「ちよつと探し物を…」

ワシオは答える。

「何をお探しですか？」

再びトシユキは質問する。

「鳥です。」

「鳥？」

「そう、鳥！」

「……いや、鳥って……」

「新種の鳥がいるかもしれないので調べさせていただきます。」

「あ、ちよつと待ってください。」

トシユキは腰に付いてるトランシーバーを取る。ワシオの事を自衛隊長に話すのだ。

「……隊長、こちらに鳥を探したいと言っている……はい……わかりました。」

トシユキはトランシーバーを切る。

「許可が取れました。どうぞお入りください。けっして調査現場には入らないように。」

注意事項を言い、トシユキとアヤコはワシオとナオコを通す。

「ありがとうございます。」

ワシオとナオコは鳥を探す。

「ところで、鳥を探すのは今回の謎の洞窟の調査に必要な事なんですか？」

アヤコがナオコに質問する。

「あ、いえ、先生の好奇心で……」

「そうですねか……あなたがいなくなった後でも、まだ真相がつかめていないようにで……」

「そうですねか……」

「鳥って……どんな鳥ですか？キツツキですか？ニワトリですか？」

「いえ、私達が探しているのはリトラです。」

「リトラ？」

アヤコの頭にハテナマークが浮かび上がる。

「あ！いえいえ！違います！リトラは名前で……種類名ではなくて！えゝそのゝ」

ナオコはパニックになっている。

「あのー落ち着いてください。」
アヤコもどうすればいいか迷っている。

ワシオは調査隊のじゃまにならないようにリトラと同種の鳥を探している。

「そんなに珍しいのですか？その少年が飼っていた鳥は…」

質問するトシユキは先ほどワシオから、なぜ鳥を探しているのか、その事情を聞いた。その時に少年スザクの事を聞いた。スザクが珍しい鳥リトラを飼っていることを。

「ああ、あの鳥はまさに新種！ぜひとも研究したいのだよ！」

ワシオは早く見つけたくてウズウズしている。

「あの…そんなに興奮しなくても…」

トシユキは言うが、ワシオの興奮は止まらない。

ここはどこかの建物。

ここに二人の男が話をしている。

「これだ。」

男はもう一人の男に写真を見せる。

「何すか？この鳥？」

写真はリトラの写真だった。

「非常にめずらしく、そういない鳥なんだ。この鳥がある少年の家で飼われている。ぜひ君に盗んできてほしい。」

「そういうこと…あいにくこの腕は高いんで…」

すかさず、男は懐から大金を出す。

「これならどうだ？」

「OKです！」

あっさりと引き受ける男であった。

同時刻、謎の洞窟では、調査隊がすごい物を見つけた。

「先生、来てください！」

ワシオはナオコに連れられて、その発見物を見る。

「何で、私が見なければならいんだ？ 私は鳥専門の生物学者で、洞窟からの発見は専門外……」

「見つかったのは『鳥の化石』なんです！」

ワシオは驚く。ワシオは恐る恐る『鳥の化石』を見る。

「こ……これは……！」

発見された『鳥の化石』は、『リトラにそっくり』だった。

「これは……」

「リトラの……化石……」

発見こそ……

アンバランスゾーンに突入する……

入口の一つなのです……

ほら…

あなたはもうすでに…

アンバランスゾーンの入口に突入しているのです…

第九話 誘拐

謎の洞窟で発見されたリトラにそっくりな鳥の化石。だが、発見された化石はリトラよりはるかに大きい。リトラはだいたい1メートルぐらいだが、発見された化石は10メートルもある巨大な鳥の化石だ。

「もしかしたら、リトラは本来大きい生物なんだ。」
ワシオはそう予想する。

しばらくワシオとナオコは洞窟の調査に参加する。

「では…まだはつきりとされていないですね。」

「ええ、なぜあのような洞窟ができたのか、検討もつきません。」

ワシオは他の学者達から洞窟について聞いていた。

「たくさん調査隊を洞窟内に入れて、調査していますが、昨日発見されたあの化石が初の発見なんです。」

「ふむ、発見した場所の付近を探れば他にも見つかるかもしれないなあ。」

ワシオの提案に学者や工事現場の作業員が動き出す。

だが、リトラの化石どころか、他の化石も見つからない。

「んゝあの時…化石が見つかったのは偶然というか、ラッキーだったのかな…」

机に座り、考え込むワシオ。そして紅茶を飲みながら考えるナオコ。

ふ…あああああああ…

またもやヒマであくびをする羽根村トシユキ。そしてとなりでジッと見張りをする上川アヤコ。

「やっぱりヒマだ……」

「そうね、緑山さんと赤木さんが来たただけだもんね。」

ハア…

二人同時にため息をつく。

「こら！お前達！！」

二人は後ろからのいきなりの声にビクツとする！

「こ…これは…」

二人は振り向く。そこには山内カズマサ自衛隊長と副隊長をしている『志賀^{しが}カツオ』二佐である。

「山内隊長に志賀副隊長！」

「も…申し訳ございません！しっかりと見張りをします！」

二人はすぐさまピシツとする。

「たく！しっかりとしろよ、新人のアホが！」

志賀がひどい言葉を発する。

「こら、志賀二佐、ひどい事を言うもんじゃない！」

とカズマサが怒る。

「けど、隊長、これくらいキビしい方がいいんですよ。」

「それはわかる、だが！お前の発言はあまりにもひどすぎる、以後気をつけるように！」

そう言い、二人は去る。

「いや～やっぱりかっこいいなあ！山内隊長。」

「ほれほれしちゃう～」

「ああいう人に俺はついて行くぞ！」

早い事でもう夜…

ここは愛川家の家、ここに一人の男が侵入する。

「ハア…ハア…ハア…」

男は息を荒くしている。

「ハア…ハア…ハア…どこだ?…」

男はキョロキョロと何かを探している。

「ハア…おお、いたぞ…は、ははははははは…」

男は息を荒くし、鳥小屋を見つける。

男の狙いは鳥だ。

「……………いた…」

男は鳥を見つけると、すぐさま鳥のくちばしと翼にベルトを締める。

鳥はその時目覚めて暴れるが、うまく動けない。

「ふへへへへ…これで報酬がたんまりと…」

男は不気味に笑い、鳥を連れ去って行く。

ポトツ

男はバカだ、大事な免許書を落として行くなんて。

そのころ、ワシオは…

「よし、決めた!」

「どうしたんですか？先生。」

いきなり言うワシオに質問するナオコ。

「明日、スザク君に頼んで、リトラを少し借りよう。」

「ええ、無理なんじゃないんですか？」

「一度頼んでみるだけだ。ダメだったらあの化石を詳しく調べるの
みだ。」

そう決まり、ワシオは睡眠をとる。

リトラが連れ去られた…

さあ、動いてきます…

大きく動いてきます…

これからもっと、動きますよ…

デスティニー
運命が…

第十話 羽ばたく運命

スザクは朝起きると、いつものようにリトラを見に行く。

「リトラー、おはよう!」

スザクは元気に朝のあいさつをする、リトラの鳥小屋に向かって。

.....

「あれ?」

リトラの「ピー!」という鳴き声がしない。

「リトラ?」

スザクはリトラの鳥小屋をのぞく。

リトラがいない...

「あれ?...リトラ?...」

スザクは周りを見渡す。

どこにもリトラがいない。

「リトラー!どこだー?」

スザクは大声でリトラを呼ぶ。

「どうしたんだい、スザク?」

スザクに声をかける父・ツバメ。

「父さん!リトラがどこにもいない...」

「なんだって!?」

ツバメもスザクと共にリトラを探す。

その頃、こちらは…

モリオカサーカスのテント

「でかしたぞ！」

団長、森岡ヨウヘイは気味悪い笑みを浮かべる。目線の先にはオリに入ったリトラがいる。リトラは睡眠薬が何かで眠らされているようだ。

「ありがとうございやす、それで報酬は…」

男は手をスリスリとして、物を欲しがる。

「ああ、ご苦労だったな、ほれ…」

ヨウヘイは男に一つの札束を渡す。見た目では10万円はあると思われる。

「足りないと思うが後はこいつで大もうけた時に支払うよ。」

「ひょー！ありがとうございやす！！」

男は喜び、テントを出ていく。

「へへへへへ…さあて、何をさせようかなあ…」

ヨウヘイはさらに気味悪い笑みを浮かべる。

そして、スザク達と言うと…

「見つからない…」

「どこ行っただ…」

まだリトラを探している。

「スザクくん！」

声の主は緑山ワシオだ。

「ああ、ユキエのお父さん、何かご用ですか？」

スザクは少し適当に問いかける。

「すまないが、もう一度、リトラに会わせてくれないか？調べたいことがあって…」

ワシオの用はリトラとの面会。だが…

「すみませんが、今それどころではありません。」

スザクはそう言い、探すのを再開する。

「え？どうしてだい？」

ワシオは質問する。

「実は、リトラが朝からどこにもいないのです。」

ツバメが代わりに答える。

「ええ！！それは大変だ！……もしもし！」

ワシオはすぐさま携帯電話を取出し、どこかへ連絡する。

数時間後、

愛川の家に警察と自衛隊がやって来る。警察は家の中を調べ、自衛隊は家の周囲を調べる。その自衛隊の中にはトシユキの姿もある。

「まさか、先生が言う『少年が飼う鳥』を探すことになるとは…」

「つべこべ言わず、探しなさい。」

トシユキとアヤコの話し声だ。

「あの…何で警察や自衛隊を…」

ツバメはワシオに問いかける。

「リトラが貴重な生物だと判明したからです。」

「貴重な生物……」

「はい……リトラは古代に生息していた生息だったのです。」

「そうですか……」

「リトラはまさに古代からの贈り物、ぜひとも研究したいのです。」

「気持ちはわかりますが、私達はリトラを譲る気はありませんよ。」

「……やっぱり……」

ワシオは少しがっかりする。

スザクは懸命にリトラの手がかりを探す。

「ん？……これは……」

スザクは何かを見つける。

「………何だ、これ？」

スザクが見つけたのは免許証だった。

スザクはすぐさま警察の刑事に免許証を届ける。

「これは免許証だね。良い物見つけてくれてありがとう。」

そして警察はその免許証に記されている人物の元へに行く。

ピンポン……

男の家であるアパートの一室の呼び鈴がなる。

「はいーい！」

男は出てくる。

「どなたですか？」

呼び鈴を鳴らしたのは刑事さんだ。

「これ……あなたの物ですか？」

刑事さんは男に免許証を見せる。

「ん？…ああ、そうです！見つけてくれてありがとうございます！」
男は喜ぶ。

「どこで見つけたのですか？」

「あちらに住んでいらっしやる春花さん家で…」

男は驚く。

早い、男は逮捕され、リトラ誘拐の依頼をした依頼主の元へと行く。

モリオカサーカスのテント

「ん…」

ヨウヘイは今リトラにさせる出し物を考えている。

「やはりサーカスらしく空中でボールをつかむ…いや…止めとこう、シンプルすぎる…玉乗りは鳥がやるには変だな…ピエロとのボケがいいか…綱渡りも良いかも…う…ん…やっぱり火の輪くぐりかな？…」

いろいろ考えていられるのも時間の問題。

「警察だあ！」

「自衛隊だあ！」

警察や自衛隊がテントの中に入ってくる。

サーカス団はもちろん驚いた。

「あの…警察が何かご用でしょうか？」

サーカス団員の1人が警察らに話しかける。

「このサーカスの団長に用がある！」

「はあ、わかりました、ちよつと待ってください。」

団員は団長、森岡ヨウヘイを呼ぶ。

「なんだね、私は今新しい出し物を考え中で忙しいのだ。」

団長がえらそうに現れる。

「失礼、私達は警察の者です、そちらに大きなクジャクのような鳥がいますでしょう。出してもらえますかな？」

刑事さんはあいさつし、団長に鳥・リトラの事で尋ねる。

「ははは…はて、何のことやら…」

ヨウヘイは笑う。とぼけているようだ。そしてヨウヘイは刑事の後ろにいる人物・スザクを見る。

「鳥がいなくなつて、さらつたのはこいつです！」つて言つたのはその小僧でしょ！、この前、鳥を譲ってくれて言つただけなのにいきなり飛び掛かつてくるのですよ、その小僧！凶暴な小僧だ！ぜつたい！その小僧のウソですよ！刑事さん！」

ヨウヘイはいやみを言う。スザクはちょっとムカツときたが、抑える。

「すみませんが、何で彼の鳥を探しているとわかったのですか？私
は一度も彼の鳥だと言つてませんが……」

刑事さんが言い返す。

「え？… ああ、予想だよ、予想！」

ヨウヘイはあわてて言い返す。

「ほう、予想……残念ですが、あなたがやとった鳥泥棒からすべて聞かせてもらいました。」

ヨウヘイはとうとう自分の終わりが来たと思った。

「……クウ！！」

ヨウヘイはくやしい顔で近くに置いてあつた鉄棒を持つて急に走り出す。

「せめて、このガキに一矢を……このガキヤヤヤヤヤヤヤヤヤ

「ヤー!!」

ヨウヘイはスザクを鉄棒で殴ろうとするが…

カン!

スザクは鉄棒を素手ではじく。

「…ハ？」

ヨウヘイは何が起きたのかわからないという顔をしている。
次にスザクはジャンプし…

ドガッ!!!

ヨウヘイに、顔面に強烈なキックをくらわす。

「ブヘー!!!」

ヨウヘイは顔がへこみ、倒れる。

ヨウヘイは逮捕され、サーカス団は解散となった。

「あ、リトラは!?!」

スザクはリトラを探す。

「いた!リトラ!」

スザクはリトラを見つけるが、周りには自衛隊員がいて、リトラを
囲んでいる。

「リトラ、助けに来たよ!さあ帰ろう。」

スザクはリトラに優しく声をかける。

「残念だが坊や、この鳥は我々が預かる。」

と一人の自衛隊員『志賀カツオ』がスザクに言う。

「な…何で…」

「この鳥は貴重な鳥なんで研究施設に送られるのだ、よってこの鳥
はもう君のペットではない!!!」

志賀は大声を出す。

「いやだ…」

スザクはグッと拳を握る。

「リトラは僕の友達なんだ…俺の家族なんだ…おまえ達には…わたさない!!」

スザクは怒る。

「いいかげんにしろ!この鳥は危険かもしれないんだぞ!」

「危険なもんか!リトラは良いやつだ!」

スザクと志賀の怒鳴り合い。

「もういい、このガキつまみ出せ。」

志賀がある他の自衛隊員に命令する。

「ハ!」

その自衛隊員は敬礼をし、スザクの服をつかみ、連れて行こうとする。

ちなみに連れて行こうとするこの自衛隊員は羽根村トシユキである。

「離せ!」

スザクはつかまれながら暴れる。

「これも仕事なんだ、それにあの鳥が凶暴な鳥だったらどうするんだい?」

トシユキは落ち着かせようとなだめる。

「いゝいゝから」

スザクは震えている。

「離せ!!!!!」

ドガッ!!!!!

スザクは体を一回転させるかのように、サッカーでボールをオーバーキックするように、トシユキの顔面を蹴り飛ばす。

「いってええええええええええ！」

トシユキは蹴られて痛み、痛かったであろう鼻を抑える。

「うわあ、鼻血出た。」

トシユキはのんきにびっこりする。

「リトラ！」

スザクはリトラの元へと駆け寄る。

「そのガキを止めろ！」

志賀の命令で自衛隊はスザクを止めようとするが、スザクは速い動きで自衛隊をよける。自衛隊はスザクを止めることができない。

「リトラ！」

パイパイ！！

スザクは叫ぶ、リトラも叫ぶ。正にスザクとリトラは絆で結ばれている。

「うわあ！！！」

「よし、捕まえた!!」

スザクは後ちよつとの所で自衛隊に捕まつた。

$$[\dots y, y, \dots]$$

スザクはもがくが身動きがとれない。

「いいかげんにしろ！このガキ！」

志賀がスザクをなぐろつとする。

その光景をリトラは見る……

キュアアアアアアアア！！

リトラは今まで鳴いた事がない、聞いた事がない、鳴き声で鳴く。まるで怒っているようだ。

「な……何だ!？」

自衛隊はびつくりし、銃を構える。

「リトラ？」

リトラはおりの中で暴れだし、バキッ、バキッ、とおりを壊す。

「何！？」

自衛隊全員は驚く。

リトラは自衛隊をにらむ。

「う…撃てええええ！！」

志賀の言葉に全員がリトラに向けて狙撃する。

キュア！！

だが、リトラはとてつもなくすばやい飛行ですべての弾丸をよける。

「何だと！？」

リトラは自衛隊員を次々と足の爪で攻撃する。

「ぎゃあ！」

「いてえ！」

「やめろ！」

自衛隊はリトラの攻撃に苦しむ。

「リトラ！」

リトラはスザクの元に行く、そしてリトラはスザクの足の間に首を入れる。

「え？リトラ？」

リトラは首に力を入れて、スザクを持ち上げる。

「わあ！」

リトラは大きく翼を広げ、羽ばたく。

「リトラ！まさか…」

そのまさかだ…リトラはスザクを乗せて飛び立とうとしている。

キュアアアアアア！！

リトラは飛ぶ。スザクを乗せて…

バサ！…バサ！…

翼を大きく広げ、羽ばたいて…

バサ！……

キュイイイ！！

リトラは空高く舞い上がる。この時、スザクは感動する、自分の力ではないが、空を飛んでいることを感じている。

「すごい…リトラ、すごいよ！僕を乗せて飛んでるよ！リトラ！すごいよ！…」

リトラは森岡サーカスのテントから遠く離れた場所まで飛んで行く。「さあ、リトラ！遠くまで逃げよう！あんな奴らに見つかからない場所まで！」

キュア！

リトラはスピードを上げる、スザクが落ちないように気をつける。

「あ、ちよつと待ってリトラ！」

スザクはリトラに声をかける。

「あそこ、母さんが入院してる病院なんだ、母さんにお別れしてから行こう。」

キュア！

リトラは「わかった」と言ったのだらう。リトラはゆっくりと人を驚かさないように病院に降りていく。降りた場所はスザクの母・モモがいる病室の窓。

コンコン…

スザクは窓を叩く。

「…え？…スザク！」

モモはスザクに気づき、窓を開ける。

「母さん、僕ら追われているんだ、自衛隊に。」

「自衛隊に？…」

モモはスザクが乗っている鳥を見る。

「その子がリトラちゃんね、追われている理由が何となくわかったわ。」

モモが理解するのが早い。

「だから…少しの間だけど、お別れを言いに来た。」

「そう、スザク、お腹の赤ちゃん、もうすぐ生まれるの。その時には帰って来てね。」

これは母の願いだ。

「うん、わかった。」

「その時はリトラちゃんも来てね。」

キュイ！

「リトラちゃん。」

モモはリトラの顔をつかんで自分のお腹に付ける。

キュイ？…

「ここにね…命が宿ってるの…」

モモは語る、命を…

「聞こえるでしょ、命の鼓動が…」

リトラはコクツと頷く。

モモはリトラの顔を離す。

「スザク、リトラちゃんをしっかりと守るのよ、あなたの親友なんだから。」

「はい、母さん。」

リトラは窓から離れて、飛び立つ。

「行ってきます！」

スザクは手を振り、母と別れる。

スザクは心の中ではさみしさを感じている…

つらいさみしさを…

誰だって…

別れは辛いものなのです…

でも…リトラは…スザクは…飛ぶ……

高く…遠くへ…未来に向かって…

第十一話 『角』

スザクとリトラが旅立ち、その後…

サーカステントでは、警察はヨウヘイを署に連衡し、自衛隊はスザクとリトラの行方を搜索している。

ガッ！！

「ゲフツ！」

今のは殴られた時の音だ。殴られたのは志賀で、殴ったのは山内隊長だ。

「この…バカ者が！！」

山内カズマサは怒鳴る。

「誰が『鳥を保護しろ』と命令した！…私や上層部は『鳥と少年を保護しろ』と命令したはずだ！なのにお前はあの少年を殴ろうとする！鳥を撃ち殺そうとする！何を考えてるんだ！」

つまり、リトラとスザク両方を保護する予定が志賀がリトラだけを保護、いや捕らえようとしたのだ。少年も保護するのは邪魔なだけ、志賀がそう考え、スザクは保護しないどころかリトラを怒らせてしまい、スザク、リトラ共々旅立ってしまった、ということだ。それで志賀は怒られている。

「く…しかし…わかりません、山内隊長。何であんなクソガキまで保護するのですか？」

志賀は殴られた跡を手で抑えながらカズマサに質問する。

「鳥はあの少年になついている。あの少年が居れば鳥は安心するは

ずだ。」

「なるほど、で、保護した後は？」

志賀の二度目の質問。

「生物学の研究施設に預ける。」

ただそれだけ、悪いようにはしないようだ。

「もちろん、飼い主は少年だ。」

「いいんですかあ、少年の手元にあんな凶暴な鳥置いといて、我々を攻撃してきたんですよ！！」

「あれはお前が少年に危害を加えようとしたから鳥が怒ったんだ。

つまり、お前が悪い。」

確かに、あそこで志賀がスザクを殴ろうとしなかったら、リトラは怒らず、何も起こらずに保護ができたはずだ。

「くうぬ……」

志賀は歯を食いしばる。怒りたいが、相手は上司、歯向かうことはできない。

そのころ、こちら緑山ワシオと赤木ナオコ、そして上川アヤコ。

「先生、落ちこまないで。」

「うん。」

リトラがどこかへ行ってしまう、研究できなくなってしまった、そのためワシオは落ちこんでいる。そのワシオをなぐさめるナオコ。

「現在、鳥ことリトラは自衛隊が搜索中です、いずれ見つかると思います。」

と、現状を報告するアヤコ。

「そうですか…あれ？あの人は？」

「え？」

ナオコの言葉の意味、それはアヤコといつも一緒にいた『彼』がどこにも見当たらないということ。

「…あれ？…羽根村君？…」

アヤコも気付く。羽根村トシユキがいない。

「すみませ〜ん！」

アヤコは近くにいた自衛隊員に聞く。

「羽根村トシユキ知りませんか？」

「ああ、隊長に単独行動の許しが出たとかでバイクに乗って、どこかへ行ったよ。」

どうやらトシユキはここにはいないようだ。

「そうですか……って単独行動って！？」

アヤコは何も聞いていないからわからない。

「鼻、治ってないのに、どこに行ったのかしら？……」

時は過ぎて、謎の洞窟の調査現場。

まだここでは現れた洞窟を調査中である。そしてあることがわかった。洞窟内の右の通路は数日前、噴火が起きた火山地帯に続いていた。つまり火山の噴火によりできた洞窟という説が正しくなってきた。

そして、左の通路では…

「何だ…これ？…」

調査隊はすごい物を発見した。

洞窟の先は行き止まりだった。調査隊は仕方なく掘ることにした。

ザック、ザック、ザック、ザックと…

掘っても掘っても土だらけだが、ある時、とんでもない物が発掘された。

それは…『大きな三日月のような形をした角』だった…

さあ、ここからが大変です…

人間はこの『角』をどうするのでしょうか…

掘り起こすのでしょうか…

壊すのでしょうか…

まあ、どうするかは…

人間次第です…

第十二話 山の中の師弟

スザクとリトラは自衛隊から逃れるために、ひとまず青空町から見える山に下りたった。

「わぁ、リトラー！いい景色だよ！」

キュア！

その山からは青空町が見渡すことができる。

「いい眺めだね〜！」

キュイ！

リトラは返事をするだけ、だけどスザクはつまんないとは思わない。今こうしてリトラと共に生きているのだから、スザクにとってリトラは最高の友達…いや…親友だ。

「さて、しばらくここで暮らそうか。」

スザクの提案にリトラは「キュイ！」と返事をする。OKのようだ。「決まり！じゃあ、どこで寝ようか？」

スザクは当たりを見渡し、無事に眠れそうな場所を探す。そして見つけたのは大人も入れそうなほら穴。

「うん、ここにしよう！」

スザクはさっそく入る。中は通路のようなものは無く、一つの部屋のような広さだった。

「まあまあかな…後は食料とかだけど、一番問題にしないかないのは…」

スザクはほら穴から出て、崖に立ち、山の下を見下ろす。自衛隊や

警察がやって来ないかをチェックする。今のところ、何もやって来ないようだ。スザクは今もドキドキしている、いつやつらがやって来るのか、少しおびえている。

キュアア…

リトラは優しく翼をスザクに当て、引っ付く。心配し、はげましているようだ。

「リトラ……うん！大丈夫！怖くないよ！」

スザクは勇気を持つ。リトラのおかげだ。

「さてと！ひとまず休もうか。」

スザクはそう言い、ほら穴の横の壁にもたれる。

「リトラも休みなよ。」

スザクの言葉に甘え、リトラはボタンと地面に寝転ぶ。

「はは、リトラもお疲れだね。」

スザクはにこやかに笑う。リトラは眠りにつく。スザクも眠る。

スヤスヤと…スヤスヤと…夢の中に……

ブロロロロロロロロ！

鳴り響くバイク音、バイクはスザクとリトラがいる山の中を走る。

「確か…この辺りに…」

バイクに乗っているのはトシユキだ。トシユキはスザクが心配で追いかけてきたのだ。鼻にはバンソウコウが貼ってある。スザクに蹴られたからだ。

「あの少年は大丈夫だろうか？…あの鳥に食べられてなければいい

のだが…」

トシユキは慎重に、辺りを見渡し、スザクを探す。だが、一向に見つからない。すると…

「や！あれは！」

トシユキは鳥ことリトラを見つける、寝ている姿を見つける、その横にスザクもいる、眠ってるが。

「鳥と少年、発見！…さて、どうしよう…」

トシユキは考え込む。

ポク…ポク…ポク……………

「ダメだ、何も思いつかない…」

ガクツと崩れるトシユキであった。先ほど、何故か木魚の音が聞こえたが。

「どうやって彼を助けようか…」

トシユキは悩む。

「誰を助けるって？」

誰かの声。

「あそこにいる鳥の近くで寝ている少年をどうやって鳥から助けだそうかと、今悩んでいるんだ……………ってエ！？」

トシユキは声のした方を見る。そこにはスザクが立っていた。

「わあああ！！少年！！！」

「僕は『少年』じゃない、『愛川スザク』だ。」

スザクは名前を名乗る。
どうやらトシユキが考えている時にスザクは起きて、トシユキに気づかれずに近づいたようだ。

「おじさん、自衛隊？」

「おじさん、て…俺はまだ二十歳だよ！」

「そうなんだ、僕は十歳だよ。」

「おお、十違いか！」

「そうだね！…ってそうじゃなくて…！」

スザクはめずらしくツツコミを入れる。

「それでおじさ…じゃなかった、お兄さんは自衛隊？僕らを捕まえに来たの？」

「捕まえに来ただなんてとんでもない。俺はただ君が心配なだけで

…」

「ホントに？」

スザクはどうも信用できないようだ。

「本当だよ、君がああ鳥に食われてないかな、と思ったりね…」

「リトラは人を食べない。食べるのは鳥と同じで木の実とか虫とか
…他は食べないよ。」

「そうなんだ…けど大丈夫なのか、鳥…いや、リトラは？」

「大丈夫だよ。」

するとリトラが起きて、トシユキの顔を見る。

「あ、リトラ。」

「な…何で…俺を見てるんだ？…」

リトラはテクテクと歩き、トシユキに近寄る。

「な…何だ…」

トシユキはビクビクする。リトラはそつと首を伸ばし、トシユキに
触れる。

「え？」

スリ…スリ…

キュア！

どうやらリトラはなついたようだ。

「リトラがなついた…じゃあ、このお兄さんは安全かな…」

「え?...何で?」

「リトラはどの人が良い人かわかって、その人になつくんだ。」

「じゃあ、俺は良い人ってことで、OK?」

スザクはうなずく。

「ヤッター、というわけでスザク君、すまないが、俺も混ざっていいかな?」

「え?」

スザクはあまりにいきなりの言葉にビックリする。

「いや、自衛隊は君達を保護しようと思っていただけ、あの人があまりに過激でね、リトラだけを捕らえようとしたんだ。」

あの人は志賀のことである。

「...だから、上司は俺に、君達を監視するように言われて、ここまで来たんだよ、まあ、リトラがなついたんだから君達と一緒に行動しようかな、と。」

スザクは少し考える。

「...うん.....」

スザクはチラッとリトラを見る。

キユイ!

リトラは「このお兄さんも一緒にでもいいよ」と答えてたように見えた。

「...うん、いいよ!」

スザクの答えもOKだ。

「ありがとう少年!」

トシユキはスザクの手をガシッと握る。

「だから僕の名前はスザクだって...」

ハアッとため息をつくスザク。

「あれ?お兄さん、鼻ケガしてるの?」

スザクはトシユキの鼻に指差す。

「これは…君にやられたんだよ！」

「え？」

「覚えてないのか？ほら、サーカスのテント内で君を連れて行こうとして、つかんだ時、君に蹴られたじゃないか。」

スザクは思い出す。

「ああ、あの時の！」

「思い出してくれたか。」

そう、トシユキに連れて行かれそうになったのでオーバーヘッドのようにスザクはトシユキの顔面を蹴り飛ばしたのだ。

スザクとトシユキ、リトラはご飯中。ご飯は山の川で釣った魚のようだ。

「うまいなあ！」

「たまにはこういうのもいいでしょ！」

魚は焼いて食べる。スザクとトシユキは焼き魚は熱いので、フーフーしながら食べている。リトラは生で食べている。

「スザク君、こういう魚焼くの、得意なんだ。」

「一回父さんと一緒に山にこもって修行してたから。」

「え！？修行！？」

「うん、格闘技の修行。」

「か…格闘？」

「そう、見せてあげようか？」

スザクは立ち、トシユキとリトラの前に出る。

「……ハアア……」

ビュッ！！

強烈なキック。

バッ！！

速いパンチ。

バッ！シュツ！バッ！バッ！！

連続で繰り出す技の数々。

「……フウ……」

終了。

パチパチパチパチパチ！

「すごい！スザク君！」

拍手するトシユキ。リトラの場合は翼をパタパタさせている。

「いやあ、僕なんかまだまだですよ。」

スザクは少し照れている。

「いやいや、俺がやってる自衛隊の武術なんかよりすごい！」

「へえ、じゃあトシユキさんがやってるその自衛隊の武道って？」

「ん？じゃあ、見せてあげようか？」

「お願いします。」

次にトシユキは立ち、スザクとリトラの前に出る。

「いきます……」

ババツ！

敵からの攻撃、パンチ、キックを防ぐ素振り。

バッ！……シュバ！……

相手をつかまえて投げ飛ばす素振り。

グワァー！…

駒のように回転にし、回し蹴り。

「はい、終わり。」

終了。

パチパチパチパチパチ！

「すごいですよ、トシユキさん！」

スザクは拍手をする。やはりリトラは翼をパタパタさせる。

「え？そうかな？」

トシユキは照れている。

「僕の『格闘術』よりよっぽど良いよ！」

「そう…じゃあ、教えてあげようか？」

「え？いいの？」

自衛隊の武術を十歳の少年に教えるのはどうかと思うが。

「そのかわり、君の格闘術教えてくれないかな？」

「いいですよ。」

「ありがとう。」

最初にトシユキがスザクに自衛隊の武術を教える。次はスザクがトシユキに格闘術を教える。その繰り返しが続く。

トシユキが師匠、スザクは弟子…

スザクが師匠、トシユキは弟子…

二人はそうやって友情を深めてゆく…

スザクにつられ…

トシユキも運命が強く動き始めているのです…

第十三話 目覚める災害

ここ、謎の洞窟調査現場では、発掘された『三日月型の角』の事で多くのマスコミが続々と取材でやって来ている。

「発掘された『三日月型の角』について何か一言!」

というコメントに自衛隊長の山内カズマサは…

「ノーコメント! 何もわかっておりません。」

と言っただけの繰り返し。

「そこをお願いします!」

カズマサは会議室であるテントに入る。マスコミ達は立入禁止なのか外にいる警備をしてる自衛隊員に止められる。

「ふう、何で『角』の事が外に知られているんだ? あれはトップシークレットになったはずだろ。」

カズマサはため息をつく。

「どうやら、どこかのルポライターが雑誌に書いた模様です。」
と、自衛隊員が言う。

「全く、迷惑な話だ。」

カズマサは会議室の自分の席に座る。

「それで、『あれ』の発掘は順調でしょうか?」

カズマサは考古学者に質問する。『あれ』とは『角』のことだ。

「発掘は順調とは言えません。回りの土が硬くて掘りにくいのです。」

「そうですか…」

カズマサはハアとため息をつき、腕を組む。

「あの…これは…私個人の提案なんです…」

「何ですか?」

カズマサは考古学者の提案を聞く。

「あの『角』の回りに…」

考古学者は提案を話す。

「……大丈夫ですか？」

「これをやって、恐竜の化石が発掘できたと聞いたことがあります

…」

「……よし、やってみましょう！」

カズマサは自衛隊員数名を連れて、何かの準備に取り掛かる。

その頃…洞窟内では…

カン…カン…カン…カン…

『三日月型の角』の発掘のために集まった考古学者達が丁寧に土を掘る。

「ふう、全然ダメね。」

ナオコもこの発掘作業に参加している。ちなみにワシオはリトラの同族の化石を調べるため、自宅に戻ったようだ。

「回りの土が硬すぎる…やっぱドリルで削らなきゃダメかな…」

ナオコはふとドリルで発掘することを思いつく。

「いや…そうしたら『角』も削れてしまう…他に良いアイデアがあるはず…」

ナオコは考える。

テントではカズマサと考古学者の一人が話し合いをしている。

「…提案はわかりました、ですが、『角』は大丈夫なんですか？」

「大丈夫です。この方法で恐竜の化石を発掘した人がいますし、あ

の『角』はかなりがんじょうで『あれ』でも壊れません。」
「そうですか…では早速準備にとりかかります。」
カズマサは席から立ち上がり、何かの準備をする。

その頃、スザク達がいる山では…

バシッ！…バシッ！…

シュバツ！…

シュシュシュシュ！…

ババ！…

今の音はスザクとトシユキが格闘の鍛練をしている音だ。

「ふう、ちよつと休憩に入ろうか。」

「はい、トシユキさん。」

トシユキはボタンと倒れ、スザクは大きな石の上に乗る。

「ふう…あ、リトラ！」スザクは空を見上げると、リトラが自分のエサを採って帰って来た。

「リトラ、おかえり。」

スザクは空から下りてきたリトラに近づき、リトラの翼を優しくなでる。

クア！

リトラもまた大きくなった、今度はコンドルよりも大きくなっている。

「また大きくなったね、リトラ！」

クア！

鳴き声も変わっている、人間で言えば声変わりだ。

「あのさ、スザク君…」

声をかけるトシユキ。声をかけられトシユキの方へと振り向くスザク。

「何？トシユキさん。」

「この前、トンネルの工事現場、というか謎の洞窟の調査現場からリトラの仲間と思われる化石が見つかったんだ。」

「え？…そうだったんですか？」

スザクは驚く。

「その化石はリトラよりもかなり大きいんだ、10メートルはあった。」

「じゅ…10メートル？」

「ああ、もしかしたらリトラは、太古の昔に生息していた巨鳥で、今よりもさらに大きくなるはずだ。」

スザクは目を見開いて驚いてるが、トシユキはそんなことを気にせず、しゃべっている。

「それでも、君は…リトラが好きかい…」

「うん、だって…リトラは僕の家族だから…」

そう言い、リトラの頭をなでる。

クワア…

リトラはなでてもらってうれしいようだ。

「そうか、良い『家族』を持ったな、リトラ。」

クワア…

時は過ぎ、夕暮れとなった時間帯。ここ、謎の『角』の発掘現場では…

「それ、本気ですか？…」

ナオコは自衛隊隊長のカズマサに問いかけている。

「ああ、本当だ…」

カズマサは答える。いったい何が本気なのだろうか？…

「本当に…ダイナマイトを使うのですか？…」

「ああ…」

どうやら、『角』を掘り起こすのにダイナマイトを使うようだ。先ほどの話はこの事だったのだ。

「大丈夫なんですか？ダイナマイトなんか使って…」

「なに、心配はいらない。『角』はとてつもなく硬い物体だし、山崩れが起きないように計算済みさ。」

「…でも…」

二人が話し合っている内に『角』の回りの土を吹き飛ばすダイナマイトの準備ができ、早速ダイナマイトを『角』にセットしようとする。

動する。ダイナマイトはトロツコに乗れている。

「何故か納得いかない。」

ナオコがつぶやく。

「君は心配性だな、大丈夫だよ、何がそんなに心配なんだい？」

カズマサが何かに納得いかないナオコに質問する。

「何て言うのでしょうか……何か……嫌な予感が……」

ナオコがそう言ったその時だった……

.....
 ~~~~~

突然だった…いきなりだった…大きな地震が起きた…地震で揺れているのはこの四季町だけではない…隣の町、いや、一つの県全域まで地震の震動が伝わっている…

「きゅあー!!」

「おわあ！！」

ナオコとカズマサはいきなりの震動に足を崩す。そしてそのままふせる。

「な……地震!？」

トンネルから少し離れた場所で見張りをしていたアヤコもいきなり  
の地震に驚き、身をふせる。

「おわわわわわわ！…ハ！ダイナマイトが！」

一人の作業員が体がゆれながら、ダイナマイトが地震の振動でトロツコから落ちかけることにあわてる。

「――うんうん」

もう一人の作業員がダイナマイトの落下を阻止する。

しばらくして……

ゴゴゴゴゴ………

地震は治まった。

「……ふう、怖かった。」

ナオコはスクツと立ち上がる。

「……すごい地震だったな……」

アヤコも立ち上がり、トンネル近くまで歩く。

「……しかし、なぜ地震が……」

カズマサは立ち上がると、トランシーバーを取り出し、スイッチを入れる。

「私だ、こちらで大きな地震が起きた！火山が噴火の活動でもしたのか調べてくれ！」

情報局に連絡し、火山の情報を聞き出す。

「………ない？………わかった！」

カズマサはトランシーバーをしまう。

「ふむ、するとさっきの地震はいつたい？」

カズマサは考える。

その時………

ドカアアアアアアン！！

「何だ!？」

なんと、山が地面の下からの『何かの力』により、地面が飛び散った。

「え?え!？」

ナオコは何が起きたのかまったくわからない。

「……あ!あれを見て!」

アヤコが叫びながら指を差す。その指先をすべての人々が目撃する。

ゴワアアアアアアアアアアアアアアアアア!

山に下から地面を裂け、現れたのは…巨大な生物。

『怪獣』だ…

「何だ!あの生物は!？」

「でけえ!こんなの…見たことねえ!」

自衛隊や学者、工事の作業員らはいきなり現れた『怪獣』に恐れる。

『怪獣』は二本足で恐竜のような体型で身長40メートルもある巨体。頭に角があり、大きな牙がある、恐ろしい姿をしている。

ゴワアアアアアアア!

『怪獣』は見境なく回りの物を破壊する。自衛隊の車にトンネル工事に使うショベルカーやブルドーザー、学者の研究機材が乗せている車を。

「全員、退避ー!ー!」

カズマサの指令に、自衛隊員全員『怪獣』から退避、つまり逃げるのであった。

「データを録っているヒマはない！みんなも逃げるんだ！」

学者達も襲いくる『怪獣』から逃げ出す。研究データが入力されているノートパソコンやディスクなどを置いて。その研究機材が置かれているテントの上に『怪獣』の足が来て、テントを踏み潰す。

グワシャア！！

おかげで研究が水の泡だ。

「みんなー！逃げろー！」

工事の作業員達も現場監督の声にともない全員逃げ出す。ある者は作業用の機械を投げ捨てて逃げ出す者もいる。

ゴワアア！！

ボワ！！

『怪獣』の口から炎の塊、火球が吐き出る。

ドガアアアアアン！！

火球がミキサー車に当たりミキサー車は大爆発する。

「わあああああ！！！」

作業員達は吹き飛ぶ。そして、その時の爆発で飛んだ火の粉がダイナマイトまで飛んできて…

ボカアアアアアアアアアアアアアアアアアン！！

ダイナマイトが大爆発をした。

「うわあああああああああああ！！」

近くにいた人々が吹き飛び、ある者は爆発に巻き込まれ、ある者は機械、あるいは岩石の破片が頭などに衝突し、致命傷を負う。そしてある者は…死んだ…

多くの人々が走る…生き残るために…死んだ者達の方まで、生き残るために…

みんなは『怪獣』から逃げ切り、着いた場所は山中。生き残ったのはほんのわずかだった…『怪獣』はトンネル工事現場付近をウロウロしているようだ。彼らがいるこの場所からでは『怪獣』は見えない。

「なんていうヤツだ…巨体だけでなく、口から火球を吐き出すとは…」

カズマサはそんな『怪獣』に恐怖を感じる。

「……自衛隊の隊長さん…あれは…あの『怪獣』は…私達…人間が生み出した怪物なのだろうか？…それとも…自然界が生み出した驚異なのだろうか？…」

ナオコは震える声で、カズマサに質問する。とても深刻な質問だ。

「……わからない…だが、わかることは一つ…」  
カズマサは答える。

「あの『怪獣』は…史上最悪の『災い』だ…」

ゴワアアアアアア！！

『怪獣』の鳴き声が町中に…

いや、日本中に…

いや、世界中に…

いや、あなたの心まで響いているかもしれません…

あの『怪獣』は人類が今まで感じたことのない…

『災害』なのです…

いつしか…

あなたの身の回りに…

その『災害』が訪れるかもしれません…

## 第十四話 命名

スザク達がいる山では…

「スザク君、どうしたんだい？」

スザクが山から見える町並みを見ている時、トシユキがスザクに話しかける。

「トシユキさん…いや、ちょっと母さんの事を思い出してて…」

「お母さん？」

「母さん…今入院してて…入院と言っても、お腹の中に赤ちゃんがいるんだ。」

「おお、スザク君、『お兄ちゃん』になるんだ。」

トシユキの言葉にスザクはうん、とうなずく。

「…それで町を見たら母さん、どうしてるかなと思って…もしかしたら赤ちゃん、もう生まれてるかも知れない。そう考えたらちょっと心配になって…」

スザクは頭を少し下げ、暗くなる。

「ふゝん、でも大丈夫なんじゃないかな？スザク君は強い子だ。そんな強い子のお母さんはもっと強い人なんだよ！」

トシユキはスザクを元氣つける。

「…そうだね、うん、きつとそうだね！」

スザクに元氣がつき、笑顔となる。

「そうだよ！スザク君のお母さんは元氣にしてるよ、あ、そういえば、俺も上川とか忘れてた。」

トシユキはやっとアヤコを思い出した。

その頃、こちらはトンネル工事現場、もとい謎の洞窟調査現場、改め謎の『角』発掘現場、いや…現在は…

『巨大怪獣出現現場！』

ゴワアアアアアア！！

『怪獣』はおたけびを上げる。そのおたけびはまるで山を越えて響いているようだ。

カズマサ達、避難組は山中を抜けて、自衛隊基地に到着し、『怪獣撃退作戦』に取りかかっている。

『怪獣』は現在、出現場所から約百キロメートルの地点にいます！」

一人の自衛隊員が『怪獣』の情報を持つてくる。

「そうか、ご苦労。」言ったのはカズマサだ。

『怪獣』はそう遠くに行っていないのか…」

カズマサはこの『怪獣撃退作戦』の隊長をしている。

『怪獣』は火球を吹く…どう迎撃すればいいのだろうか…それに、あの『怪獣』の正体はいつたい…」

カズマサは考えるが、これは科学者や生物学者の役目ではないだろうか。

「隊長さん！」

やって来たのはナオコだ。

「どうかしたか？」

「『怪獣』の正体がわかりました！」

ナオコの言葉にカズマサは驚きと感激が心からあふれた。

「でかした！で、あの『怪獣』の正体は？」

「はい、これです！」

ナオコはカズマサにあの時の本『古代生物図鑑』を見せる。

「これは…前に見せてもらった古代生物図鑑だね。」

「はい、これを見てください。」

ナオコが指を指した古代生物は…

「『ゴメテウス』…この古代生物は君が前にあの洞窟が出来た一説で称えたヤツだな…」

「はい、この『ゴメテウス』がああ『怪獣』だと思われます。この角、このゴワゴワとした皮膚、間違いなくコイツです！」

「…つまり、君の説は正しかったということか…」

「その通りです！でも、おかしいんです『ゴメテウス』は四本足なのです…それなのに、ああ『怪獣』は二本足…これはどういうことなのでしょう？」

ナオコは疑問に思う。

「わからん…だが、仮にもああ『ゴメテウス』だとすると…『ゴメテウス』が何らかの理由で体が変異したとも考えられる。」

「あゝ、考えられますねえ。」

「すなわち、ああ『怪獣』は『ゴメテウス』であり、『ゴメテウス』ではない、『ゴメテウス』の進化した姿と思える。」

「おお、なるほど！」

ナオコは感激する。

「そうなるヤツに名前が必要だな…さてどういった名前が良いかな？」

カズマサは『怪獣』の名称を考えだす。そしてナオコも考えだす。

「え？そうですねえ…んー…あ！そうだ！『怪獣』は『ゴメテウス』の進化形だから、『ゴメテウス』から取って、『ゴメス』というのはどうでしょうか？」

「『ゴメス』か…いいな…それにしよう！」

ここで『怪獣』の名前が決まった、怪獣の名前は『ゴメス』だ。

そう、『名前』…

『名前』は大事です…

どんなモノでも『名前』はとても大事なモノです…

もちろん、怪獣にも…

呼び名が無ければ…

それは存在しないのと同じようなモノなのです…

## 第十五話 怪獣退治

自衛隊はゴメス退治に乗り出す。

ドカアアアアアアアン！

ドゴオオオオオオオン！

自衛隊が発射させた多くのミサイルが爆発する音が鳴り響く。

「クソオ、全く効かない！なんて頑丈な皮膚だ！」

すべてゴメスに当たっているのにゴメスは何ともないのだ。

「……やはり…ミサイルでは無理なのか…」

自衛隊員達は悔しく思う。

「…作戦をたてよう、全員退避！」

一度作戦をたてるため、自衛隊員達はカズマサの声と同時に逃走する。

最初の作戦は巨大な麻酔弾を撃ち込むという作戦だ。指揮を執っているのはカズマサだ。

「機能順調！」

「麻酔弾セット、よし！」

「起動OK！」

麻酔弾はミサイルのようで先がとんがっている、ミサイルがゴメスにさされば麻酔薬がゴメスに注入されるという仕組みだ。通称『麻酔ミサイル』

「うまく…いくだろうか?…」

カズマサは不安になっている。

「信じましょう…成功を…」

カズマサに元気付けるアヤコ。

「標準をしる! 目標は怪獣『ゴメス』!」

「標準セツトしました!」

「カウントダウン!」

「発射まで…10秒前!」  
10…9…8…7…6…5  
4…3…2…1…」

発射!!

ドシューウウウウウウン!!!

麻酔ミサイルがゴメスに向けて発射される。ミサイルがすごいスピードでゴメスに突撃する。

ゴワアアアアアア!!

ゴメスは吠える。ミサイルに向かって吠える。

シューウウウウウ!!

ミサイルは止まらず、ゴメスに向かって飛んで行く。

ガシィ!!

ミサイルがゴメスに当たる瞬間だった。ゴメスはなんと、ミサイルを右手でつかんだのだ。

ゴワアアアア！！

ゴメスは空に向かってほえる。

シュウウウウウ……

ミサイルは燃料切れなのか停止してしまった。

ゴワアアア！！

ブン！

ゴメスはミサイルを投げ捨てた。ミサイルは自衛隊の元へ落ちる。

ガシャアアアアン！

続いての作戦が行われる。

続いての作戦は『ソーラー光線作戦』。

ゴメスは自衛隊のミサイルをもろに直撃しても平気だったので、今度は太陽の熱で作り出した『ソーラー光線』を当ててみるという作戦だ。

まず自衛隊はたくさんのソーラーパネルを用意する。次にソーラーパネルを太陽にむけ、太陽光線を吸収する。

「大丈夫でしょうか？……」

アヤコは不安に思う。

「今度は君が不安になっているのか…大丈夫！必ず成功する！」  
カズマサの自信満々の言葉にアヤコも自身がつく。

「私も…成功を祈ります…」

「発射まで…10…9…8…7…6…5…4…3…2…1…」  
「放てえええ！！」

カズマサの言葉に自衛隊員が発射ボタンを押す。

ビイイイイイイイイイイ！！

ソーラー光線が発射される。あまりのまぶしさにみんなは目を閉じる。

ゴワアアアアアアアア！！

ソーラー光線がゴメスに直撃する。ゴメスは苦しんでいる。

ゴ…ゴワア……

ゴメスの鳴き声が聞こえなくなっていく。

ゴ……

ビイイイイイイイイイ……

ソーラー光線が止む。

…ボタン！！

ゴメスが力つきたかのように倒れる。

「や…やったか?…」

カズマサは恐る恐る目を開けて、ゴメスを見る。

「どうでしょう?…」

アヤコも目を開ける。

ゴワア……

ゴメスは倒れたまま動かない。

「やったああああ!!…」

みんなは歓声を上げる。みんな勝利を喜んでいる。

これにて一件落着。

そのころ、スザクとカズマサは…

グウウウウウウウ…

眠っている。

スウウウウウウウ…

クア…

リトラは寝ている二人を見ている。何か寒そうだと思っているようだ。

………クア！……

リトラは何か思いつく。

ファサ……

リトラは二人の上に乗る、リトラは軽いのか二人は気づかず、そのまま寝ている。どうやらリトラは自分が二人の布団になろうとしている。

クア……

その翼はまるで自然の羽毛布団だ。スザクもトシユキも気持ち良さそうだ。

スウウ……

二人共、気持ち良く、夢の中だ。

現代に現れる怪獣……

それは、夢か、現実か……

人はそれを、うまく信じれないものなのです……

夢であってほしい…

夢なら覚めてほしい…

皆さんも、そう願ってしまつてしょう…

## 第十六話 復活

チュン…チュン…

チチチチチチチチ…

ピヨピヨ…

朝が来た、今日も美しい朝が来た。今ここには朝日に照らされる倒れているゴメスの姿があつた。

ふわああああああ…

一人の自衛隊員が眠たそうな顔であくびをする。

「いつまでこうしているんだろう…」

自衛隊員はゴメスを見て、つぶやく。

自衛隊の作戦本部はゴメスが倒れている位置から約30キロメートル離れた場所に設置された。

そして、その作戦本部ではゴメスをどうするか、自衛隊、学者、政治家などが集まり、会議をしている。

「あれは死んだのか？」

自衛隊の長官が山内カズマサー佐に問いかける。

「それはまだわかりませんが、現在学者達が調べています。」  
と、カズマサは答える。

「では、生きている可能性があるというのか？」

一人の自衛隊幹部が言う。

「その可能性は否定できません。」

カズマサは答える。

「もし生きていたら、我が大学の研究施設でぜひとも研究したい！」  
と、一人の大学教授である中年の男が答える。

「いや、あれは危険な生物だ！だから殺すべきだ、研究なら死体にしてもできるだろ！」

と、自衛隊幹部が喋る。

「いや、貴重な怪獣だから保護しよう。動物園などに連れて行こう。」

と、政治家が言う。

「バカな！あんな怪獣を保護する意味があるか！だいたい動物園に連れていったら被害が起こるだろ！」

一方的に自衛隊幹部は怒鳴る。

「まあまあ、落ち着いて…あの怪獣ゴメスをどうするかは学者達の報告を聞いてから決めましょう。」

と、長官が言う。

「…まあ長官が言うのなら、仕方ありませんね。」  
と自衛隊幹部は静まる。

その頃、ゴメスの生命を調査している学者達は…

ピコン…ピコン…

たくさんの機械をゴメスに取り付けて、ゴメスを調べている。

「ふーむ…」

その学者達の中にはナオコもいた。ナオコはゴメスについて考えている。

ピ…ピ…ピ…ピ…ピ…

たくさんの機械をゴメスの体中に取り付けて、ゴメスの細胞、内部組織、生態を調べている。

「…フム」

ナオコは機械とコードでつながっているパソコンの前に座っている、パソコンの画面には機械から送られてくるゴメスのデータが表示されている、ナオコはそれを見つめている。

「普通の生物とはあきらかに違う…こんな初めて見る…」

ナオコが言っているのは、ゴメスは普通の生物と違い、かなり温度が高く、火炎放射を吐き出す器官であるのだ。

「いったい…何が起きて…こんな進化を遂げたんだろう…」

ナオコは考える。他にもゴメスには鉄の固い皮膚、ノコギリでも切れないほどとてつもなく固いのだ。こんな皮膚を持つ生物は世界中探してもいない、ますます謎は深まるばかり。とりあえずナオコはパソコンの前から離れて、ウーンツと背伸びをする。

「……さて、とりあえずデータを保存して、レポートにまとめようかな。」

ナオコはパソコンの画面上にある『保存』というマークを押して、今まで録ったゴメスのデータを保存し、ディスクにコピーして、レポートを書き始める。

と、その時…

ピー…ピー…ピー…ピー…ピー…ピー…ピー…

「え？」

ナオコはパソコンを見る。

「こ…これは！…」

ナオコが見たパソコンの画面には、ゴメスの心臓の音、心拍数を示すセンサーが映っていた。そのセンサーはゴメスの心拍数を読み取

り、反応した。しかも心拍数がだんだんと強くなっていく。  
「心拍数が…まさか、まだ生きてるの!?!…」

……………ゴワア…

ゴメスが鳴く。

「へ?」

ナオコは驚き、声が出ない、ゴメスが鳴いた、まだ生きているのだ。

…バキ……………バキ……………

何かの音、それは、ゴメスが起き上がろうとしているのだ、その起き上がる時に周りにあった物が倒れたり、壊れたりしている音だ。

「あ…あ……」

ナオコはあわてて作戦本部に回線が繋がる電話の受話器を取る。

「もしもし!作戦本部!?!応答願います!」

《……………はい、こちら作戦本部!》

「…ゴ…ゴメスが…ゴメスが…」

バコオオオオオオオオオオオ!!

ゴワアアアアアアアア!!

《え?…何だつて!?!》

「だから！ゴメス！ゴメスが！！！！」

ゴワアアアアア！！

ゴメスは立ち上がった。

ボウン！！

ボカアアアアアアア！！

ゴメスは立ち上がるなり、火球を吐き、周りにある物を破壊し始めた。

「きやああああああ！！」

ナオコはゴメスを恐れて逃げ出す。

《もしもし！！もしもおし！！》

機械の上にゴメスの足がのしかかり、回線は壊れ、切れてしまう。

この事は作戦本部にも届く。

「何！ゴメスが！」

長官はバンツと立ち上がる。

「ハ！そして、やつは町に向かっていきます！」  
と、自衛隊部下が答える。

「大変だ！急いで避難勧告を！」  
と、政治家が命令する。

「ハ！直ちに！」

部下は急いで立ち去る。

「山内君！ゴメスに攻撃をするんだ！」

長官はカズマサに命令を言う。

「ハ！」

カズマサは敬礼をし、急いで走る。

ゴワアアアアアア！

ゴメスは自衛隊の兵器をあざ笑うかのように暴れる。

ドゴオオオオオオオン！！

「撃てえええええ！」

カズマサの命令に従い、自衛隊はキャノンを撃つ。

ドン！      ドン！

ドドン！

ボカアン！！

ゴワアアアアア！！

やはり、ゴメスは何ともなかった。

「くそぉ！」

その頃、スザクとトシユキとリトラは…

クアアアア…

ふわあああ…

スザクとリトラは今熟睡から目が覚めた。

「あゝよく寝た！」

スザクは腕をおもいつきり伸ばす。

「ね、リトラ。」

スザクが声をかけると「クア！」と返事をする。「うん！」と答えたのだろう。

「スザク君！」

トシユキは洞窟の外にいて、スザクを呼ぶ。

「何？トシユキさん。」

トシユキに呼ばれ、スザクは洞窟から出てくる。

「実は、さっき携帯電話にメールが来ててね。そのメールの内容がね…」

トシユキはスザクにメールを見せる。

「トンネルから巨大怪獣登場！至急来たれよ！」

………

「何、これ？」

「さあ、送ったのは俺の同期の上川ってやつなんだけど、巨大怪獣ってというのが、なんか変だよな…ウソっぽいし…」

「これ送った上川さんって人、何考えてるんでしょうか？」

「さあ…」

しばらく沈黙となる。

「とりあえず、気晴らしにラジオでも聞くか。」

トシユキは乗ってきたバイクに乗せていたラジオを取り出す。そしてスイッチを押す。

ガー…… ガガー…… ピー…… ガガガー…… ピー……

「あれ？」

ラジオからノイズが聞こえる。

「ここ、山だから電波来ないんじゃないですか？」

「え？ いやあ、携帯がメールを受信できたからラジオも聞けるかな、  
と思つて……」

ハハハとトシユキは笑う。

ガガガー…… ピーピー…… 《臨時ニュースをお伝えします。》…… ガガ……

「あー！」

「お、聞こえた！ でも、臨時ニュースつて？」

…… 《昨日よりトンネル工事現場こと謎の洞窟調査現場から出現した  
『巨大生物』は自衛隊によって倒されましたが、ふたたび立ち上がり、  
活動を開始しました！ ……

………

「えええええ！？」

二人はびっくりする。そのころリトラは足で頭をかいていた。

「あのメール、本当だったんだ！」

「うわ〜。」

…《…あ！ここで新たな情報が入ってきました！》…ガガガ…ピ  
ー…《『巨大生物』は地面に潜ったようです！》…ピピー…ガガ  
…《どこに行ったのか、検討が付きません。》…

「へえ…」

「でも、『巨大生物』は、どこに行ったんだろう？」

ドカアアアアアアン！！

「え！？」

スザクはここ、山頂から見渡せるスザクが住む町を見る。音はそこ  
から聞こえてきたのだ。

「あ！あれは！？」

スザクがこの場所から見たのは、先ほどラジオのニュースで言っ  
ていた『巨大生物』…

ゴワアアアアアア！！

「こ…ここに現れた…」

なんと、『巨大生物』こと『ゴメス』はスザクが住む町に出現した。  
「あれが…」

スザクの声は震えている。

ゴワアアアアア！！

ゴメスは空に向かって吠えている。吠えながら歩き、町を破壊して  
いる。

「スザク君のお母さんは…入院中だというのに！」

「母さんだけじゃない、父さんや…リカや…ケンタ、ヨシキ、ユキエも…まだ町にいる！何とかしなきゃ！…」

スザクはリトラのもとに行き、リトラに声をかける。

「リトラ！町に行つて、母さん達を助けに行こう！」  
クア！

リトラは前かがみになり、スザクはリトラに乗り込む。

バサッ！ バサッ！

リトラは羽ばたく。

バサ！！

そして飛ぶ。町に向かって…の時に…

「ちよつと待つて！スザク君、リトラ！」

トシユキがスザク達を止める。

「俺も連れてつてくれ、俺は自衛官として町民を避難させる義務がある！」

トシユキの頼みにスザクは…

「わかった！リトラ、トシユキさんも乗せてあげて！」

クア！

リトラはトシユキを乗せて、再び羽ばたき空を飛ぶ。

「行くよ、トシユキさん！しっかりつかまって！」

「つかまるつたつて…どこに？」

リトラには馬につける『くら』のような物がないため、トシユキは簡単に落ちてしまいそうだ。スザクはリトラの首辺りをつかんでいる。

バサッ！！

「おおわわわわわわ！」

リトラの一回の羽ばたきでトシユキは落ちそうにジタバタする。

「行くよ、リトラ！みんなを…家族を守りに！」

クアア！！

リトラは「おー！」と言つかのように泣き声を上げる。スザクとリトラは立ち向かう、ゴメスに向かって…

バサッ！！

リトラは飛ぶ…

スザクとトシユキを乗せて…

守りたいものがあるから…

リトラは羽ばたき、助けに行く…

勇気を持って…

怪獣ゴメスに立ち向かう…

みなさまも勇気を持ち…

守りたいものを…

守ってください…

例え、その敵が…

怪獣であつても…

## 第十七話 勇気を持って

ゴワアアアアア！！

ボウン！

ボカアアアアア！！

ゴメスは吠えながら、火球を吐き、歩いて、町を破壊し続けている。

わああああああ！！

きやああああああ！！

助けてくれえええ！！

ゴメスの恐ろしさに逃げまとう人々。

ドカアアアア！！

ドゴオオオオ！！

ババババババ！！

自衛隊の戦車、戦闘機、戦闘ヘリ、装甲車が銃やミサイルで攻撃するが、ゴメスにはまったく効かなかった。自衛隊に構わず、ゴメスは破壊という名の行進を続けている。

ゴワアアアアア！

スザク、リトラ、トシユキは町の上を飛んでいる。

「リトラ、トシユキさん、見て！」

リトラとトシユキはスザクが指さす方向を見る。その方向にはゴメスによって破壊され、燃えている町並みがある。

「何ということだ……」

トシユキは驚く、一体の怪獣にこれほどの力があつたとは……夢にも思わなかったであろう……

「これ……全部、あの怪獣がやったんだよね……」

「ああ……まさか……こんな……空想的な事が起こるなんて……」

スザクは震えている、トシユキも震えている。怪獣ゴメスに対して恐れているのだ。ゴメスこそ……恐怖の塊であり、象徴なのだ。

「リトラ……今から病院に行くけど……恐くない？……」

スザクはリトラに問いかける。リトラは首を縦に振り、返事をする。

「……恐くないね……」

スザクは内心ホッとする。

「それじゃあ、リトラ……」

スザクは前方から11時の方角を指さす。

「あっちの方に病院がある、お母さんはきっと、そこに居る、行くう！」

「待つて、スザク君！もしかしたらもう避難してるかもしれないよ。」

トシユキは前方から3時の方角を指さす、そこにはこの町の地震などの避難所となる小学校がある。

「だから避難所に行くべきじゃないかな？」

「ああ、なるほど。リトラ、一度学校に行こう。」

クア！

リトラは小学校へと向かって飛んで行く。

ドドドドドドドドドドド！

ドカアアアアアン！

ババババババババ！

自衛隊はゴメスに向かってミサイルを撃ち込む。

ゴワアアアア！

ゴメスは吠えている、まったく効いていない。

「え！？」

リトラから下り、小学校内へと入り、中の人から聞いたのは、まだ病院の患者達が避難していないという事だった。

「母さんは…まだ…病院に！？」

「スザク君、急いで行こう、病院に！」

「はい！」

スザクとトシユキは急いで小学校から出て、リトラの背中に乗る。  
「リトラ、病院へ飛ぶんだ！急いで！」

クア！

リトラはバサバサと羽ばたき、病院に向かって飛んで行く。

その頃、病院では…

「わあああああ！！！」

「きやああああ！！！」

「ひえええええ！！！」

患者達はこの病院へとやって来るゴメスに恐れ、パニック常態になっている。

「みなさん、落ち着いてください！」

「速やかに避難してください！」

病院の看護師が患者達を安全に誘導している。

「これで全員か！？！」

逃げ行く患者達の列が終わると、この病院の院長が看護師に問いかける、とその時…

バサッ！      バサッ！

クア！！

リトラが病院の前に降り立つ。

「え！？今度は何！？！」

院長と看護師がリトラを見て驚く。

「あの！君らは！？」

院長がリトラの上に乗っているスザクとトシユキに聞く。

「私は自衛隊員の羽根村トシユキです。この子の母親がこの病院で入院していると聞いてやって来ました。」

「すみません、突然やって来てしまって…」

スザクとトシユキは挨拶をする。

「は…はあ、しかし、たった今患者は全員避難しましたよ。」

「いえ、一人、妊婦さんが残っています！」

「何だつて！？何故！？」

「おなかの中の赤ちゃんが生まれそうなんです！」  
それを聞いたスザクはこう思った。

…まさか…母さん…

「あの、その人…『愛川モモ』って名前じゃ…」

スザクはおそろおそろと、問いかける。

「ええ、そうよ。」

やっぱり…

「僕の母です！」

「え、そうなの！？」

「じゃあ、いつしよに！」

スザクは看護師に案内され病院の中へと入って行く。

病院の中でスザクが見たのは、ガラスの奥でとても苦しんでいる母の姿だった。

「母さん！」

スザクは母を呼ぶ、だが聞こえていない。苦しみで耳をかたむける事ができないのだろうか、はたまたこのガラスが防音ガラスになっているのだろうか、真相はどうであれ、母にはスザクの言葉が届いていない。

「どうしよう… もうすぐでここに怪獣が来るっていうのに…」

スザクは慌てる。

「あの常態で君のお母さんは動かすことはできない。すぐにおなかの中の赤ちゃんを取り出す。避難はそれからでなきゃ無理だ！」  
母の担当医師がそう言う。

「…わかりました、お願いします。」

スザクは答える。今のままでは母は… いや、おなかの中の赤ちゃんは助からない、ここで赤ちゃんを取り出すのが懸命だと判断した。

一度外に出たスザク。その目の前あるのは燃え盛る町から噴き上がる煙だ。

「……町が…」

スザクは震える言葉でしゃべる、ゴメスへの恐怖心。そしてそのゴメスはこちらへと進んで来ている。

「もしもし！隊長？羽根村です！」

羽根村トシユキは山内カズマサ隊長に電話をする。

「今、私は病院の前にあります！この病院の患者は避難したのですが、一人だけ動かす事ができない常態でして、怪獣がこちらに来ないよう、防衛のため救援をお願いします！」

《了解した、今すぐそちらに向かい、『ゴメス』を食い止める。》

「ゴメス？何ですか、それは？」

トシユキは聞き覚えのない言葉に質問する。

《あの巨大生物の名前だ。くれぐれも用心してくれ、相手は未知な

る生物、何をしでかすかわからない!』

「はい!」

ピ!

トシユキは携帯電話の通話を切る。

「スザク君、君も避難するんだ、リトラといっしょに……」  
トシユキはスザクに避難するよう指示する。しかし……

「僕は……ここにいる……」

スザクの答えにトシユキは驚く。

「す……スザク君……」

「……母さんはおなかの中の赤ちゃんのために……苦しみと戦っている……トシユキさんは人々を守るために……これから戦うんでしょ……僕……一人だけが逃げるなんて……そんなの、イヤだ!」

スザクの強い言葉にトシユキは思わず息を呑む。

「……でも、スザク君……ここはあぶないよ……君の気持ちはわかる、けど、子供はここに居ちゃあ、危険だ……」

「大丈夫です!リトラ、君はどうする?」

スザクはリトラに問いかける。

……………クア……………

リトラは燃える町を見る。赤く燃えている町、この町をこのようにしたのは『怪獣ゴメス』。

ゴワアアアアア！

ゴメス、家をつぶす…

ゴメス、火球を噴く…

ゴメス、ほえる…

リトラは決意する、覚悟を決める。

バサッ！！

リトラは飛ぶ、ゴメスに向かって。

「リトラ！！」

怪鳥<sup>リトラ</sup>は戦いに行った…

強大な敵に…

最悪の敵に…

勇気を振り絞って…

愛するものを守るために…

戦つ…

ゴ  
メ  
ス  
怪獣と…

## 第十八話 リトラVSゴメス

クアアアアアア！！

ゴワアアアアア！！

リトラはゴメスに立ち向かう、愛するものを守るために…

「リトラ…」

スザクはゴメスに立ち向かうリトラを見つめる。

「リトラはきっと…スザク君や、この町の人達のために戦う気なんだ。」

トシユキはわかったのだ、リトラのやる事を…

クア！

リトラはまずゴメスの目の上を足の爪でひっかく。

ゴワア！

ゴメスは痛がるが、あまり効いていないようだ。ゴメスは反撃としてリトラに向かって火球を三回吐く。

クア！

ヒュン ヒュン ヒュン

リトラは軽やかにゴメスの火球を避ける。

ゴワァ！！

ゴメスは当たらないことにムカつく。

クァー！！

リトラはゴメスの顔の前に出て、ゴメスの顔面をつつく。

ゴワァ！！

ブンッ！

バキッ！

クァッ！

ゴメスは頭にきたらしく、リトラをしつぽで叩き落とした。

「リトラ！！」

スザクは叫ぶ。その時にリトラは地面に落ちた。

「リトラ！！」

スザクはもう一度叫ぶ。そして走り出す。

「あ！スザク君！」

トシユキはスザクを止めようとしたが、その前に走り出し、スザクの体をおさえることができなかった。

「リトラ！」

スザクはリトラの元へとたどり着く。

「リトラ、大丈夫？」

スザクはリトラの心配をする。

クア！

リトラはすぐに起き上がる。そしてまた羽ばたき、再度ゴメスに立ち向かう。

クアアア！

リトラはゴメスに向かって回転をしながら飛んで行く。

ゴワアアアア！

ゴメスはリトラに向かって火球を吐く。

ボウ！ ボウ！ ボウ！

クア！

リトラは回転しながら火球をよける、そしてリトラはそのままのスピードでゴメスのおでこをくちばしで突き刺す。

ゴワア！！

ゴメスはとても痛がるが、リトラもピンチになった。

クアア…

くちばしがゴメスのおでこから抜けなくなった。

ゴワアアアアアア！

ゴメスはリトラをおでこから抜こうとするかのように暴れだす。

「リトラ！」

「さっきよりひどくなってる…」

町を心配するトシユキ、リトラを心配するスザク。

ゴワアア！

むやみに暴れるゴメス。町がどんどん破壊されてゆく。

スポッ！

クア！

ゴメスがブンツ！と首を振った時、その拍子にリトラはおでこから抜けたのだった。

ドドーン！！

リトラはそのまま家にぶつかつた。

「リトラ！」

スザクはまたリトラの元へ駆け出す。

「リトラ！大丈夫か！？」

スザクの言葉が聞こえたのか、リトラは「クアア…」と鳴く、さっきの衝撃で弱まってしまったようだ。

ズシン！　ズシン！

ズシン！　ズシン！

ゴメスがリトラに向けて進撃する、リトラを殺すつもりだ。

「リトラ、飛んで！早く！あいつが来る！」

スザクはリトラに飛ぶよう指示する。

「リトラ、飛ぶんだ、踏み潰されるよ！！」

スザクは翼の羽をつかんで、引っ張る、リトラを移動させようとする。

「リトラ！！」

スザクの叫びにリトラは起き上がる。

「リトラ！…え？」

リトラはもうフラフラとしている。それでもゴメスと戦う気だ。

「リトラ……」

スザクはこんなにも体力を消耗しているのに、あんな巨大な敵に立ち向かうリトラの姿に感動した。

「リトラ…僕を乗せて！」

スザクの言葉にリトラはおどろく。

「リトラだけ、こんな思いはさせない…僕もいつしよに戦うよ！」

リトラはスザクの言葉を聞き入れ、スザクを背中に乗せる。

バサッ！！

リトラはスザクを乗せて、羽ばたく。

「行くぞ、リトラ！」

クア！

スザクを乗せたリトラはゴメスに立ち向かう。

ゴワア！

ゴメスは大きな手でリトラ相手にパンチをする。

ヒュッ！

リトラはそんなパンチを軽々とよける。そのままリトラはゴメスの周りを飛行する。

「リトラ！ゴメスの目を狙うんだ！」

リトラはスザクの命じた通りにゴメスの顔に行き、足のつめでゴメスの目をひっかく。

ゴワアアアア！！

ゴメスは痛がっている。

「やった！」

スザクは喜ぶ。

グウワア！！

ゴメスはリトラとスザクをにらむ。

ブンッ！！

ゴメスの大きな右手のつめがリトラとスザクに襲いかかる。

「リトラ、よけるんだ！」

ガッ！

スザクが命じるも遅く、つめはリトラの翼に当たってしまった。翼

を攻撃され、バランスを崩したリトラはそのまま落下していく。  
「うわあああああ!!」

ドシイイイインツ!!

リトラとスザクは市街地に落ちる。

「スザク君!」

トシユキはスザクとリトラの下へと駆け出す。

「う…う…」

スザクはさっきの衝撃で弱っている。

クア!

リトラはスザクのその姿を見て鳴く。

「スザク君、しっかり!」

トシユキはスザクに呼びかけるが、「う…」と弱った声しか出さない。よく見ると頭から血が出ている。腕の骨も折れているかもしれない。かなりの重傷だ。

ドシンツ! ドシンツ!

ゴメスはリトラ達が居る方向へと進攻していく。リトラ達の向こう側にはスザクの母が出産をしている病院がある。

母が危ない…

クアアアアアアア!!

リトラは大きな鳴き声を上げる。鳴き終えたら、リトラは羽ばたき、ゴメスへと立ち向かう。

「リトラ、もうやめるんだ!」

トシユキは叫ぶが、リトラは止まらない、やめない。

「おまえがどうこうできる相手じゃない！戻れ！戻るんだ！！」  
さらに叫ぶが、それでも止まりはしないリトラ。

クアアアアア！！

リトラは何かを決断したかのように見える。

グワアアアアアア！！

ゴメスとても怒っており、リトラを殺そうと思っている。

ボウンッ！ ボウンッ！ ボウンッ！

ゴメスは火球を三発吐く。リトラはそれをまたもや軽やかによける。

クアアアア！！

リトラはゴメスの真上で止まる。いったい何をするのだろうか？

ピシャアアアアア！！

なんとリトラは口から『緑色の液体』を吐き出した。

「あれは…何だ？」

トシユキはあれが何なのかわからない。もちろんスザクにもわからない。

クアアアア！！

ピシャアアアアア！！

グワアアアアアア!

その緑色の液体を浴びたゴメスはとても痛がり、苦しんでいる。

ピシヤアアアアア!

リトラはまだゴメスに向けて、まだ緑色の液体を吐いている。

「……リトラ……」

スザクはかすかだが、その光景を見る。リトラは何がやりたいのか、スザクは理解していなかった。

クアアアアアア!!

ピシヤアアアア!!

グワアアアアア!!

ゴメスは苦しみながら暴れている。

グワアアアアアアアアアアアアア……

しばらく暴れると、ゴメスはゆっくりと力つきたかのように倒れる。

バタアアアン!……

「え?……」

トシユキは何が起きたか、さっぱりわからなかった。

「まさか……終わったのか……ゴメスを……」

倒したのか…

スザクはふらふらと動いて、ゴメスを見る。

ゴメスはまったく動かない。

「…ということは…」

ゴメスは…死んだ……

トシユキは大きく叫ぶ。

「やったああああ!!」

トシユキはバンザイしながら跳びはねる。

「ね! やったよね! スザク君!」

「ええ!」

スザクも喜ぶ。体はふらふらだが、心から喜んでいるだろう。

「リトラ! やった!」

スザクはリトラに向かって大きく叫ぶ。

「リトラ!」

クアア!……

だが、喜ぶのは少しの間だけだった。

クア…アアア……

リトラは紙のようにヒラヒラと落ちてゆく。

「リトラ?…」

クアア……

ドシン……

リトラは地面に落ちた。

「リトラ！」

スザクはふらふらとしているが、がんばってリトラの下へと行く。

「リトラ！しっかり！……」

スザクはリトラを揺さぶるが、動こうとしない。

「リトラ……」

死ぬの？……

スザクの予感のあたりそうだ。リトラは弱ってきており、静かに目を閉じてしまいそうだ。

クア……

「リトラ……やだよ……死んじやいやだよ！……ここまでがんばって……戦って……ゴメスを……倒したのに……死んじやうなんて……おかしいよ！」  
スザクはしゃべりながら泣いている。

「リトラ！生きてよ！リトラ！」

友との死別、それはとてもつらいことだ。

クアア……

「リトラ……うう……」

クア……

バイ  
バイ

.....

「リトララ…リトララ！」

リトラは動かない。

もう…死んじやった…

「リトラアアアアアアアアアアアアアアアア！」

スザクは泣く、強く泣く。涙が目からあふれるほど泣く。服のえりがびしょびしょになるほど泣く。それほど悲しい事なのだ。

うわああああああああああああ！！！！

スザクのつらくて、悲しい泣き声だ。その泣き声は日本中に響き渡るほかかもしれない。

「スザク君……」

トシユキはかける言葉が無い。どうすれば良いのか、わからない。

オギヤー  
オギヤー  
オギヤー  
オギヤー

「え？」

スザクは泣き声のする方を見る。そこには車椅子に乗っているスザクの母モモと看護師がいた、そして看護師の腕には『赤ちゃん』がいる。

「母さん……その子……」

スザクは赤ちゃんを見つめる。

「ええ、スザク、あなたの新しい『家族』、あなたの『妹』よ。」  
赤ちゃんは女の子だ。看護師はスザクの下へ行き、スザクに赤ちゃんをわたす。

「僕の…新しい…家族…僕の…妹……」

スザクは赤ちゃんを抱きしめながらリトラの方へと向く。

「……リトラ…ほら…僕の妹だよ…かわいいだろ…リトラ…君の家族でもあるんだよ…リトラ…」

スザクはまた泣き出す。

「母さんと…妹を…守ってくれて……」

ありがとう…

リトラはゴメスを倒し、死んだ。その後、リトラの死体は自衛隊に回収されず、手厚く土の中へと埋葬された。そしてリトラと違い、ゴメスは自衛隊に回収され、研究所に輸送された。

リトラの埋葬されるところをスザクは泣きながら見ていた。

これが…

スザクとリトラの物語…

リトラは死んだけど…

ずっと…スザクの心の中で…

生き続けています…

この小説を読んだあなたの心の中にも…

リトラはいますよ…

なぜって？…

それは…あなたもリトラの事を知ったからですよ…

## 最終話 リトラの墓と女の子

あの…怪獣災害から四年という歳月がたった。青空町は青空市に変わり、市内の真ん中には、市のシンボルとも言える公園『リトラの墓公園』がある。ゴメスに勇敢に立ち向かい、死んだ、リトラのお墓なのである、公園の真ん中にはリトラの像があり、周りには桜が植え付けられている。今、その桜が満開している。

チュン チュンチュン

ピーピー

チチチチチチチチ

公園の周りで小鳥達が気持ち良くさえずる。

キャッ！ キャッ！

この公園で一人、桜を見てはしゃいでいる幼い女の子がいる。

「元気だな…」

そして、その女の子をベンチに座って見ている一人の中学生の少年。

「……ふう…あれから、もう四年か……」

少年はため息をつき、リトラの像を見る。

「……リトラ…」

お兄ーちゃん！

女の子が少年に向かって、テポテポとかけて来る。少年は女の子の兄のようだ。

「ん？…どうしたの？」

少年はニツコリと笑い、女の子に問う。

「はい、これ！」

女の子が少年に差し出したのは花で作ったかんむり。それを女の子は少年の頭に被せる。

「ありがとう。」

少年は笑顔でお礼を言う。

「お兄ちゃん、どうして悲しい顔してるの？」

「え？」

「お兄ちゃん、さっきからリトラを見てて、とっても悲しいお顔をしてた。ねえ、どうして？」

少年は驚く。幼い子供でもこんな勘が当たるとは。少年は笑みの中に悲しみを隠し持っていたのだ。

「……リトラの事を思い出していたんだ。」

少年は話す。

「お兄ちゃんにとって大切な鳥さんだったんだよね。お父さん言うてた！」

「…そう、リトラは僕の友人、いや、親友だった。リトラが死んだ時、僕は…涙がかれるまで…泣いたよ。」

少年が話を終えた時、女の子は少年の目をハンカチで拭いてあげた。

「え？」

「お兄ちゃん、泣かない、泣かない。」

「……ありがとう。」

少年は女の子の手を持って礼を言う。

しばらくして、少年はベンチから立ち、妹の手をつなぐ。

「さて、帰ろうか。」

「うん！」

少年はリトラの像を見る。

「リトラ、僕の妹は、四歳になったよ。」

少年は女の子の誕生日になると、かならずここに連れて来る。妹の誕生日はリトラの命日。

「バイバイ、リトラ！」

女の子は手をふる。

「これからは、お兄ちゃんがさびしくないように私がリトラになってあげる！」

女の子は少年の手から離れて、鳥の翼のように腕をパタパタとして、走る。

「ピョピョー！ピョピョー！あたしはリトラなのだ！」

「ハハハ、こら、はしゃぎすぎでコケるんじゃないぞ！」

少年はそんな無邪気な妹をかわいく思い、笑う。

少年こと『スザク』は十四歳となった…

妹は四歳となった…

兄妹はこれからも…

リトラの分まで…

明るく生きていくのだった…

これで、この物語は…

おしまい…

## 最終話 リトラの墓と女の子（後書き）

この小説を読んで下さって、真にありがとうございます！

この物語は名作『ウルトラQ』の第一話をモデルにしたお話。みなさん、気に入っていただけましたでしょうか？気に入っていただけましたら、うれしいです。

最後まで読んで下さって、ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8959j/>

---

リトラ ～守りたいもの～

2010年10月10日22時07分発行